ナチス・ドイツ時代のラジオ音楽番組「ドイツの巨匠による不滅の音楽」に関する研究

佐　藤　　英

はじめに

本稿は，1944年２月20日からヨーゼフ・ゲッベルスの命により開始されたラジオ放送のクラシック音楽番組「ドイツの巨匠による不滅の音楽 Unsterbliche Musik deutscher Meister」（以下，「不滅の音楽」）に関するものである。この番組は，毎週日曜日の午後６時からドイツ全土の統一番組（Reichsprogramm）として放送された。ドイツ帝国放送協会が威信をかけて制作した番組だっただけに，先行研究において言及される機会も少なくない。ところが，この番組の実態について詳細に検討することは，これまで行われてこなかったように思われる。

本稿の主たる目的は，「不滅の音楽」の第１回から，現時点で確認可能な最後の回，すなわち1945年２月18日までのほぼ１年間のすべてについて，曲目と出演者を可能な限り詳細に把握し，このシリーズの番組内容の再構成を目指すことである。この番組は，プロパガンダ上，重要視されていたこともあり，多くの情報が当時の刊行物等に掲載されている。ナチス・ドイツの終盤期の番組のなかでも，番組内容をかなりのところまで把握できる稀有なケースであるにもにもかかわらず，「不滅の音楽」の全体像を俯瞰するための基礎資料，例えば番組の内容をまとめたリストさえも，これまで作成されていない。このような現状ゆえ，この番組について，当時の資料を典拠にしつつ全体像を把握する

ことが大きな意味を持つと思われる。この検証作業に際しては，過去に放送されていた音源が再利用された場合，その放送日も判明した限りで記している。現存する音源へのアクセスについても，情報が得られた範囲で提示した（未発売のものも含め，原則として，論者が実際に音源を試聴している）。また，番組制作サイドにおいてこのシリーズをどのように構成しようとしていたかについても，帝国放送協会の番組編成会議の議事録等を参照しながら明らかにする[1]。

論者がこれまで検証を行ってきたドイツ帝国放送協会の番組に関する研究においては，放送の受容者についても，何らかの形で取り上げてきている。今回，この受容者の役を担うのは，ゲッベルスその人である。先に記したように，この番組はゲッベルスの指令で開始されたものだが，彼自身，ラジオでこの番組を聴き，感想を日記に残しているのである。つまり，ゲッベルスの立ち位置は，制作にかかわる人間であると同時に，番組の聴取者でもあるという，極めて特異なものなのである。今回は，ゲッベルスの日記の引用を多く提示した。本稿において訳出した部分はこれまで注目されておらず，芸術の受容者としての彼の側面に興味のある向きに日本語で読める情報を示しておきたいと考えたためである。ゲッベルスの内面に深く迫ることは本稿の意図ではないが，日記に記された番組の感想等を通じて，彼の音楽観や，戦争という現実の中で芸術がどのようにかかわってくるのか，といったことについても，この引用を通じて大筋が把握できよう。

1．「不滅の音楽」開始までの経緯

「不滅の音楽」の放送は1944年２月20日から開始された。この２日後，『フェルキッシャー・ベオバハター』のベルリン版において，この番組は次のように紹介された。

> 宣伝相ゲッベルス博士の命により，大ドイツ放送は日曜日に重要な放送シリーズ「ドイツの巨匠による不滅の音楽」を開始した。毎回，18時から19

時に大ドイツ放送の全放送局を通じて，ドイツ第一級の文化オーケストラがドイツ最高の指揮者のもとで演奏するのである。
この放送シリーズの名称が強調しているように，ドイツ音楽の永遠の財産がドイツ楽壇の最適の解釈者により模範的な演奏で放送される。この放送シリーズは，毎回，占領地域の放送局，ドイツの外国向け放送，友好国と中立国の多くの放送局においても中継される。[2]

この番組を開始するまでには，番組関係者のあいだで多くの議論があったはずである。だが，「不滅の音楽」のシリーズのコンセプトが形成されるまでの過程を追うことは難しい。今回，参照した帝国放送協会番組編成会議の議事録では，「不滅の音楽」についての議論が行われていた時期の記録が欠けているためである。しかし，これとは別に制作されたある番組の成立に，「不滅の音楽」の萌芽が認められるように思われる。1943年から開始された「大コンサート――永遠のヨーロッパ音楽 Das Große Konzert – Ewige Musik Europas」（以下，「永遠のヨーロッパ音楽」）がそれである。この章では，「不滅の音楽」の検証に入る前に，この「永遠のヨーロッパ音楽」から「不滅の音楽」の開始までの過程について，私見を示したい。

1.1 「永遠のヨーロッパ音楽」から「不滅の音楽」へ

番組編成会議においてこの「永遠のヨーロッパ音楽」について議論されたのは1943年６月からである。６月17日の議事録によると，タイトル案は「永遠のドイツ音楽 Ewige Deutsche Musik」で，「ヨーロッパと外国向けのプロパガンダ目的で行う卓越した代表的音楽放送」にすることが目指された。放送は月１回，20時15分から22時で，この時点では日曜日ないし月曜日が候補になったという[3]。この記録が示しているように，この番組は構想の早い段階からドイツ帝国放送協会の主力番組の一つとされていたばかりか，ドイツ音楽に限定したプログラムによって「ドイツ」の存在感を国内外にアピールすることすらも目論まれていた。ところがこの方針は，この翌週の会議において大きく転換さ

れる。放送される内容は「ドイツ音楽に限らず，外国の作曲家の音楽」とされたのである。そして，放送は日曜日，ドイツ放送（Deutschlandsender）を通じて行われることになった[4]。

この後，この会議で審議された内容を番組コンセプトの原則とし，関係部署での検討が続けられたようだ。番組の方針が提示されるのは，この約20日後の７月14日の会議においてである。この会議では，件の番組が「大規模で卓越したヨーロッパのコンサートシリーズ」となることがあらためて確認された。オンエアは毎月第一火曜日，20時15分から22時で，送信局はドイツ放送，起用される音楽家はクラシック音楽界の第一線で活躍する者に限られた。この番組がクラシック音楽に焦点を当てたものだったため，同時刻に帝国プログラムにおいて娯楽番組を流すことになった。これにより，制作者サイドは聴取者の棲み分けを図ろうとしたのである[5]。この後，第１回の番組案がゲッベルスに提出され，放送が許可された。このことが会議で報告されるのは７月28日である[6]。

奇妙なことに，先に述べた７月14日の会議において，この番組の開始は大々的に宣伝しないことになった。そのため，この初回放送の日付については，同年８月３日であったらしい，と推測として述べざるを得ない。当日の『フェルキッシャー・ベオバハター』ベルリン版のラジオ欄においては，先述の時刻に「大コンサート」なる番組が予告されている[7]。一方，別の新聞においてこの番組は「ヨーロッパ・コンサート」と紹介されている[8]。この２つの事例から，ここで言われている番組が「永遠のヨーロッパ音楽」だとわかるのである。ラジオ関係の情報誌『帝国放送』の番組予告でも，この件については言及されていない[9]。ゲッベルスの許可を得てから放送までの時間が非常に短かったため，宣伝しようにもスケジュールが間に合わないという現実的な事情もあったと思われる。

この番組の第２回にあたる９月７日の放送は，『フェルキッシャー・ベオバハター』ベルリン版において，「大コンサート――永遠のヨーロッパ音楽」として紹介されたものの，刊行物において番組内容の詳細は告知されなかった[10]。この番組初期の詳細な内容を伝えるのは，ヒンケルがゲッベルスに放送の許可

を求めた文書である。これによると，ドイツ語圏だけではなく，ナチス・ドイツと縁のある国の作曲家の作品により，この番組が構成されていたことがわかる。ヴィルヘルム・イェルガー《パルティータ》（作曲者の指揮，ウィーン・フィル），マックス・フォン・シリングスの歌曲集《鐘の歌》から〈写真〉（ペーター・アンダースのテノール，ローベルト・ヘーガー指揮），シューマンの《ピアノ協奏曲》（アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリのピアノ，エルネスト・アンセルメ指揮），リヒャルト・シュトラウスの《ばらの騎士》から三重唱と二重唱（マリア・チェボタリ，ティアナ・レムニッツ，パウラ・ブーフナーのソプラノ，アルトゥール・ローター指揮），ファリャの《間奏曲とスペインの踊り》（ヨハネス・シューラー指揮，ベルリン放送管弦楽団），パガニーニの《ヴァイオリン協奏曲》（ギラ・ブスタボのヴァイオリン，ミュンヘン放送管弦楽団，ベルティル・ヴェッツェルスベルガー指揮），フラン・ロートカのバレエ音楽《村の悪魔》（ヨハネス・シューラー指揮，ベルリン放送管弦楽団）[11]。ある程度の情報が事前に刊行物で公開されたのは，10月５日の第３回目の放送からである。『帝国放送』の1943年10月号によると，この放送の出演者として，指揮者はカール・ベーム，ローベルト・ヘーガー，レオポルト・ルートヴィヒ，オットカール・パリク，アルトゥール・ローター，ソリストはエルナ・ベルガー，ゲオルク・クーレンカンプ，トルステン・ラルフ，取り上げられた作曲家はベートーヴェン，モーツァルト，シューベルト，シベリウス，スメタナ，リヒャルト・シュトラウスが挙げられている[12]。

こうして，「永遠のヨーロッパ音楽」の放送が開始されたが，この番組の素案が議論されていた時に言及されていた「ドイツ音楽」をメインとするもののほうはどうなったのだろうか。考えられるのは，「永遠のヨーロッパ音楽」から切り離され，別の形で実現する方法が模索された結果，約半年後の1944年２月に開始された「不滅の音楽」になったということである。実現に至る過程は，この章の最初に述べたように，資料によって裏付けることができないのだが，ゲッベルスがこの指令を出すにあたり参考になるところがあったとすれば，この「永遠のヨーロッパ音楽」のコンセプトを固める過程で得た知見であったと

推測される。先に見たように，「永遠のヨーロッパ音楽」は，もともとドイツ音楽の紹介の場として構想されていた。また，第一級の演奏家によるクラシック音楽を放送する場とすることが目されていたこと，国内外へのプロパガンダとしての側面が強く意識されていたことも，「不滅の音楽」と共通する要素である。

また，番組タイトルの単語の使用法においても，「永遠のヨーロッパ音楽」と「不滅の音楽」の橋渡しをする要素が認められる。「永遠のヨーロッパ音楽」で使用されているのは形容詞「永遠の ewig」だが，この語と「不滅の音楽」において使用されている形容詞「不滅の unsterblich」とは意味がかなり近いのだ。ドイツ語の母語話者にとってこの二つの形容詞が類語の範疇にあり，容易に交換可能なものであることを物語る事例がある。「不滅の音楽」が開始された直後，この番組を評した記事がウィーンの『クライネ・フォルクス・ツァイトゥング』紙に掲載された。この時，この記事の執筆者は番組のタイトルを「ドイツの巨匠による永遠のドイツ音楽 Ewige Musik deutscher Meister」（強調は論者による）と書く。しかも，記事のタイトルだけではなく，本文中においてこの番組名を示す場合にも，同様の誤記をしているのである[13]。

1.2 「不滅の音楽」開始以前に放送されていた日曜午後6時の番組内容

ところで，「不滅の音楽」が放送されたのは，日曜日の午後6時から7時までの1時間である（放送される内容により，終了時刻が変更されることがあった）。今度は，当時のラジオ番組におけるこの時間の意味について考えてみたい。

もともとこの日曜18時からの1時間は，オーケストラのコンサート録音を紹介する時間だった。1944年1月から2月中旬，つまり「不滅の音楽」放送開始前の事例から，代表的なものを見てみよう。1944年1月16日に放送されたのは，ベートーヴェンの《ヴァイオリン協奏曲》である。これは，同年1月9～12日にベルリンの旧フィルハーモニーで開催された，ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮，ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートの録音だった。この時のヴァイオリン独奏はエーリヒ・レーンである[14]。この翌週の1月23日

には，リヒャルト・シュトラウスの《家庭交響曲》がこの番組で放送されている。これも，前述のコンサートにおいて演奏された曲である[15]。フルトヴェングラーとベルリン・フィルの演奏は，「不滅の音楽」開始の１週間前，つまり２月13日にも放送されている。演目は，同年２月７/８日にベルリン国立歌劇場におけるコンサートの前半部分，すなわちヘンデルの《合奏協奏曲》とモーツァルトの《交響曲第39番》だった[16]。このようにこの日曜日の夕方の放送枠は，「不滅の音楽」が開始されるまで，話題のオーケストラコンサートを伝える即時的な性格の強いものだったのである。

２．1944年２月から７月までの「不滅の音楽」の番組内容

本章では，「不滅の番組」の放送内容と，プログラム構成に関する事例を検討する。

この番組で放送されたコンテンツの検証を始める前に，放送で使用された音源について，前提となる情報を確認しておきたい。「不滅の音楽」において使用された音源はすべて，事前に制作された録音である。使用されたフォーマットは，録音盤が使用された一部の例を除き，録音テープと思われる。当時の放送用収録は，原則として無観客で行われている。放送用の音源としてはコンサートを収録したものも存在しているが，本稿において取り上げる事例の場合，フルトヴェングラーの演奏に数件，確認できるだけである。

2.1　1944年２月と３月の番組

当時の新聞の記述によると，「不滅の音楽」では，毎回，ブルックナーの《交響曲第３番》の第４楽章からのファンファーレで開始された[17]。第１回（２月20日）の番組では，ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮，ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団によるベートーヴェンの《交響曲第５番「運命」》と，ルートヴィヒ・ヘルシャーのチェロ，エリー・ナイのピアノによるベートーヴェンの《チェロ・ソナタ第３番》が放送された[18]。

先に，この前の週のこの時間の番組はフルトヴェングラーによる1944年２月７/８日のコンサートの前半部分であると述べたが，このコンサートの後半はまさにこの《交響曲第５番》だった。この作品のオンエアで使用された音源は，1943年６月末に無観客で収録され，同年７月11日に初回放送が行われたものと思われる[19]。同年11月２日放送の「永遠のヨーロッパ音楽」においては，この録音が番組の第１曲だった[20]。一方，《チェロ・ソナタ第３番》は，1943年４月24日にベルリンにおいて収録されたものである[21]。

注目したいのは，この年の１月の事例にあるように，２回の番組を使って，コンサート１回分を放送するというこれまでのスタイルが，この２月13日の番組と２月20日の「不滅の音楽」第１回の放送にも認められるということである。このことは「不滅の音楽」が，同時刻に放送されていた以前の番組からの看板のすげ替えとして始まったことを暗に示している。

２月22日の『フェルキッシャー・ベオバハター』ベルリン版の番組紹介記事によると，第２回（２月27日）と第３回（３月５日）の番組では，以下の演目が予定されていた。すなわち，第２回はベーム指揮，ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団によるハイドンの《交響曲第92番「オックスフォード」》とブラームスの《ヴァイオリンとチェロのための二重交響曲》（ヴァイオリン：ヴォルフガング・シュナイダーハン，チェロ：リヒャルト・クロチャク），第３回はヘーガー指揮，シュターツカペレ・ベルリンによるモーツァルトの《交響曲第35番「ハフナー」》とシューマンの《交響曲第４番》である[22]。この記事は，このシリーズを開始するにあたり，制作サイドが数回先までオーケストラ作品でプログラムを組んでいたことを示しているが，実際の放送はこの予告とは大きく異なっていた。放送された演目は，第２回がブルックナーの《交響曲第７番》（ベーム指揮，ウィーン・フィル）[23]，第３回がシューベルト特集で《音楽に寄せて》（バス・バリトン：ハンス・ホッター，ピアノ：ミヒャエル・ラオホアイゼン），《ピアノ五重奏曲「ます」》（ピアノ：ミヒャエル・ラオホアイゼン，ヴァイオリン：ヴィルヘルム・シュトロス，ヴィオラ：ファレンティン・ヘルテル，チェロ：ルドルフ・メッツマッハー，コントラバス：カール・シューベルト），《交響曲第７番「未完

成」》（ベーム指揮，ウィーン・フィル）だったのである[24]。この２回の放送においては，別番組において使用された音源が活用された。ブルックナーの《交響曲第７番》は1943年10月31日[25]，シューベルトの《未完成》は1943年10月10日に放送されたことのあるものだった[26]。また，《ピアノ五重奏曲「ます」》も，1943年８月２日のシューベルトの歌曲と変奏曲を取り上げたラオホアイゼン出演の番組において放送された可能性がある[27]。

この変更により，「不滅の音楽」の性格は大きく変わった。予告されたプログラムには，この番組枠はオーケストラ演奏を放送する時間で，指揮者を看板に据えて番組が構成されていたことの名残が認められる。実際に放送された番組は，作曲家主体で，オーケストラ作品に限らず，歌曲や室内楽などからも選曲を行うという方向性が打ち出されている。この方針転換により，この番組は演奏家に対する興味から音楽を聴くという通好みのものから，個々の作曲家に対する理解を多角的に深められるという，クラシック音楽にそれほど通じていない聴取者に対してもアピールできるものへと変化したのだ。そして，この番組を支えたのは，ドイツを代表する一流の演奏家による，放送目的で制作された録音である。この先，３月末までの放送された番組は，おそらく新録音が間に合わなかったため，過去に別の番組で使用された音源を巧みに活用したものとなった。以下に示す選曲においても，高い演奏レベルを求めたこの番組の姿勢を垣間見ることができる。

３月12日，ヨハン・ゼバスティアン・バッハ特集：《管弦楽組曲第２番》，《２つのヴァイオリンのための協奏曲 ニ短調》（K・シュティーラーとD・M・カルディのヴァイオリン，ヘルマン・アーベントロート指揮，ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団），《音楽の捧げもの》から〈フーガ〉（リチェルカータ）（エドヴィン・フイッシャー指揮，ベルリン・フィル），《トッカータとフーガ　ニ短調》（ヴォルフガング・アウラーの独奏）[28]。ゲヴァントハウス管弦楽団による２曲は，1943年３月７日に放送された，このオーケストラの200年記念番組で使用された録音と思われる[29]。《音楽の捧げもの》は1943年３月７日に収録され[30]，同年３月28日に放送された音源である[31]。

3月19日，ベートーヴェン特集：《ピアノ・ソナタ第14番「月光」》（ヴァルター・ギーゼキングのピアノ），《ヴァイオリン協奏曲》（ゲルハルト・タシュナーのヴァイオリン，ヘルマン・アーベントロート指揮，ベルリン・フィル）[32]。前者は，ドイツ放送アーカイブの資料によると，1944年3月10日に収録されたものということになる[33]。後者については，1943年5月16日の「ベートーヴェン・コンサート」において放送されていた可能性がある[34]。『帝国放送』の番組予告によると，ソリストはジョコンダ・デ・ヴィートだが[35]，同年4月28日に開催されたコンサートにおいては，タシュナーが登場している。タシュナーはベルリン・フィルのコンサートマスターで，キャンセルしたデ・ヴィートに変わりソロを担当したのだろう。

3月26日，ブラームス特集：《ハイドンの主題による変奏曲》，《交響曲第4番》（いずれも，ヴィルヘルム・フルトヴェングラー，ベルリン・フィル）[36]。この放送においても，別の番組で使用された音源が活用された。1942年6月21/22日のベルリン芸術週間（Berliner Kunstwochen）におけるフルトヴェングラーとベルリン・フィルによるコンサートを収録・放送したと思われる番組（1942年7月12日）に，件の作曲家の《交響曲第4番》が含まれているのである[37]。この交響曲は，1943年12月12～15日の彼らのコンサートにおいても，《ハイドンの主題による変奏曲》とともに演奏された。同年12月19日にブラームスの複数の作品を取り上げる彼らの演奏による60分番組が放送されているので，この際にこの2曲が放送されていた可能性は高い[38]。

なお，『帝国放送』に掲載された予告記事によると，3月19日はブラームス特集，3月26日はベートーヴェン特集とされている。演奏者は，先述の実際の放送と同じである[39]。このことは，記事掲載後，放送順の再検討が行われたことを示唆している。この番組シリーズにおけるこのような再調整の事例は，この後もしばしば認められる。

2.2　1944年4月の番組

4月に入ると，オペラの録音や，この番組のための新録音も「不滅の音楽」

において取り上げられるようになった。4月2日の演目は，ヴァーグナーの《トリスタンとイゾルデ》第2幕だった。この音源は，1943年5月14日から19日にベルリン国立歌劇場においてローベルト・ヘーガーの指揮で制作された放送用全曲録音の一部で，録音に参加していたのはマックス・ロレンツ（トリスタン，テノール），パウラ・ブーフナー（イゾルデ，ソプラノ），ルートヴィヒ・ホフマン（マルケ王，バス），ヤロ・プロハスカ（クルヴェナル，バリトン），マルガレーテ・クローゼ（ブランゲーネ，アルト），オイゲン・フックス（メロート，バス），エーリヒ・ツィンマーマン（牧童，テノール），フェリックス・フライシャー（舵取り，バリトン），ベンノ・アルノルト（若い水夫，テノール），ベルリン国立歌劇場合唱団，シューツカペレ・ベルリンである[40]。「不滅の音楽」開始前，この録音の第2幕は1943年6月27日[41]，第3幕は7月11日にオンエアされていた[42]。なお，1943年のヴァーグナー生誕130年を記念し，彼の誕生日にあたる5月22日の第1幕を皮切りに[43]，5月27日に第2幕[44]，6月3日に第3幕の順で帝国プログラムにおいてもこの作品が放送されている[45]。番組表等から指揮者の名前を確認することはできないが，時期的に見て，このヘーガーの録音が使用された可能性はあるだろう[46]。

続く4月9日の番組では，1944年3月28日と29日にウィーン・コンツェルトハウス・モーツァルトザールで放送用に収録された音源が用いられた。この回はモーツァルト特集で，《ヴァイオリン協奏曲第5番「トルコ風」》，《セレナード第13番「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」》，《交響曲第41番「ジュピター」》だった。出演したのはカール・ベーム指揮によるウィーン・フィル，ヴァイオリン独奏は，このオーケストラのコンサートマスター，ヴォルフガング・シュナイダーハンである[47]。このモーツァルト特集は，4月16日に放送が計画されていた。当初，4月9日に予定されていたのは，ハンス・クナッパーツブッシュ指揮，ベルリン・フィルによるブルックナーの《交響曲第4番「ロマンティック」》である[48]。ブルックナーは，理由は伝えられていないが，5月14日に放送が順延された[49]。

4月にブルックナーの放送が実施されなかったため，その後の放送予定にも

変更が生じた。4月23日に予定されていたヘンデル特集も，1週間前倒しの4月16日となった。ヘンデルの回で放送された曲目は，《合奏協奏曲 ニ長調》作品6-5（クナッパーツブッシュ指揮，ベルリン・フィル），《クセルクセス（セルセ）》からのアリア（アルト：マルガレーテ・クローゼ，ヘーガー指揮，シュターツカペレ・ベルリン），《オルガンと弦楽器のための協奏曲 ニ短調》（オルガン：ギュンター・ラミン，アーベントロート指揮，ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団），《メサイア》から〈ハレルヤ〉（ヘーガー指揮，ベルリン国立歌劇場合唱団と管弦楽団）である[50]。しかし，4月30日に計画されていたヨハン・シュトラウス特集は当初の日程のままだった。この番組のための音源は，この年の4月24日にウィーンにおいて収録されることになっていたためである[51]。そのため，4月23日分の穴埋めをする必要が生じた。最終的にこの日はベートーヴェン特集となり，ジーフクリート・ボリス（ヴァイオリン）とミヒャエル・ラオホアイゼン（ピアノ）の演奏による《ヴァイオリン・ソナタ第5番「春」》と，フルトヴェングラーとウィーン・フィルによるベートーヴェンの《交響曲第7番》がその演目となった[52]。前者の《ヴァイオリン・ソナタ第5番》は，同年4月13日にベルリンの放送スタジオで収録されている[53]。放送予定に合わせて，録音が準備されたと思われる。一方，フルトヴェングラーの演奏は，1943年5月23日に放送されたものが改めて放送されたと考えられる[54]。

4月30日のヨハン・シュトラウス特集で取り上げられた作品は，当日の新聞の情報によると，最初にウィーン・フィルによるワルツ（ベームとクラウス指揮），そのあとで《こうもり》から序曲と第2幕フィナーレだった[55]。この記述から，1944年4月24日にウィーンにおいてベーム指揮で収録された《こうもり》の当該箇所が使用されたことは確実だが，ワルツについては詳細不明である。その可能性としては，《こうもり》とともに収録されたワルツ《春の声》とワルツ《美しく青きドナウ》が挙げられる。なお，このベームによる放送録音に参加した演奏家は，エステル・レシー，エミー・ローゼ，エリーザベト・シュヴァルツコプフ（以上，ソプラノ），メラニー・フルートシュニッグ（アルト），カール・フリードリヒ（テノール），アルフレート・ポエル（バリトン），

エーリヒ・クンツ（バス），ウィーン国立歌劇場合唱団である[56]。一方，クラウス指揮によるシュトラウスのワルツについては，ウィーン・フィルの元旦のコンサートに関連して多くの録音が行われており，放送された作品を特定することは難しいように思われる。

2.3　1944年５月と６月の番組

５月と６月の番組も，他の番組で使用された音源と，新録音を用いてプログラムが組まれた。

５月７日はハイドン特集で，「春」というテーマで曲目が選出された。シュナイダーハン四重奏団による《弦楽四重奏曲第67番「ひばり」》と，クレメンス・クラウス指揮，ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団によるオラトリオ《四季》の〈春〉がそれである。オラトリオは1942年６月４日に放送用に収録されたもので，出演歌手はトルーデ・アイッペルレ（ソプラノ），ユリウス・パツァーク（テノール），ゲオルク・ハン（バス），ウィーン国立歌劇場合唱団である[57]。「不滅の音楽」で放送された〈春〉の部分は，すでに1943年４月18日にドイツ放送においてオンエアされていたことが確認できる[58]。

この翌週の５月14日には，先述の通り，クナッパーツブッシュ指揮によるブルックナーの《交響曲第４番「ロマンティック」》だった。この音源はこのとき初めて放送されたと思われるが，現存するテープのデータによると，録音日は1944年９月８日である[59]。この音源の放送日とは，データ上の矛盾が認められる。この件について私見を示したい。最初に考慮しなくてはならないのは，このブルックナーの録音は聴衆を入れないスタジオ制作という点である。制作コストを考慮すれば，初回放送後に同曲の再録音が行われた可能性は低い。したがって，９月８日を録音日とするデータそのものを疑う必要がある。それでは，この日付は何か。可能性として考えられるのは，この日付はダビングが行われた日である。この点を考えるにあたり，この翌日の日付を持つブラームスの《交響曲第３番》の録音テープについて確認したい。ブラームスの録音テープにはＫ 147a，Ｋ 147b，Ｋ 147c，Ｋ 147d という管理番号が付されているが，

９月９日という日付はコピーが作成された日とされている[60]。このブラームスの録音が放送されたのは，このコピーテープの作成後，すなわち1945年１月１日の「不滅の音楽」である（この放送については後述する）。テープの成立と放送の因果関係に矛盾がないため，データとしての信頼性は高いのは，このブラームスの《交響曲第３番》のほうだ。問題のブルックナーのテープの管理番号は，K 146a，K 146b，K 146c，K 146d で，ブラームスのそれと隣接している。このことから，９月８日をブルックナーの録音日とする記述は誤りで，９月８日にはブルックナー，９月９日にはブラームスのダビングが行われたと判断できるように思われる[61]。なお，件のブルックナーについては，近年，1944年３月９日ないし10日の収録とする調査結果が出ている[62]。

５月21日はフランツ・リストの特集だった。ヘーガー指揮，シュターツカペレ・ベルリンによる《ファウスト交響曲》第１部と終結部の合唱（テノールはエーリヒ・ヴィッテ），《ピアノ協奏曲第１番》（ピアノはジークリート・グルンダイス），そして交響詩《レ・プレリュード》である[63]。協奏曲のほうはドイツ放送アーカイブに同一の演奏者による音源が残されているが，収録データは1944年７月11日，ベルリンの第１放送スタジオとされている[64]。これも，収録データの扱いに注意が必要な事例である。

５月28日のシューベルト特集は，フルトヴェングラー指揮，ベルリン・フィルによる《交響曲第８番「ザ・グレート」》である[65]。この音源も，過去に放送されたものと思われる。1942年５月31日と６月１日に開催された，ベルリン芸術週間における彼らのコンサートで演奏された録音は，同年６月７日に放送された可能性がある[66]。また，同年12月６～８日のベルリン・フィル定期公演においても同曲が演奏され，同年12月13日にオンエアされている[67]。３月のブラームスの事例でも述べたように，1942年のベルリン芸術週間で演奏された演目は，あらためて収録が行われている。おそらくベルリン芸術週間の録音は，契約上，放送後に残しておくことが認められていなかったのだろう。そのため，定期公演の演奏が録音され，その後の放送で使用されたと考えられる。

６月４日はブラームス特集で，ヴィルヘルム・ケンプのピアノ，クナッパー

ツブッシュ指揮，ベルリン・フィルによる《ピアノ協奏曲第１番》と，ウィーン国立歌劇場合唱団による《運命の歌》が放送された[68]。

６月11日はモーツァルトの特集で，曲目はベルリン・フィルのメンバーによる《クラリネット五重奏曲》，ヘーガー指揮，シュターツカペレ・ベルリンによる《交響曲ト短調》だった[69]。『帝国放送』によると，この日の曲目として《交響曲第35番「ハフナー」》が予告されている[70]。最終的に演目が変更されたということなのだろう。

この翌週の６月18日はベートーヴェンの作品で，ジークフリート・ボリス（ヴァイオリン），ミヒャエル・ラオホハイゼン（ピアノ）による《ヴァイオリン・ソナタ第９番「クロイツェル」》に続き，ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮，ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団による《交響曲第４番》も取り上げられた[71]。フルトヴェングラーの演奏は1943年６月に収録され，同年７月４日に初回放送されたものと同一と思われる[72]。

６月25日はカール・エルメンドルフ指揮，シュターツカペレ・ドレスデンによるヴェーバーの《魔弾の射手》の抜粋で，この年の６月１日に収録されたばかりの全曲録音が活用された。共演者はアルノ・シェレンベルク（オットカール，バリトン），ハインリヒ・プフランツル（クーノ，バリトン），マルガレーテ・テシェマッハー（アガーテ，ソプラノ），エルフリーデ・トレチェル（エンヒェン，ソプラノ），クルト・ベーメ（カスパール，バス），ロレンツ・フェーエンベルガー（マックス，テノール），スヴェン・ニルソン（隠者，バス），クルト・ヴェセリー（キリアン，テノール），シャルロッテ・クラッセル（花嫁付添の乙女，ソプラノ），エディス・ディートリヒ（花嫁付添の乙女，アルト），ドレスデン国立歌劇場合唱団である[73]。この全曲録音は，同年10月22日の16時から18時にドイツ放送においてオンエアされた[74]。

2.4　1944年７月の番組

『帝国放送』によると，７月の番組として当初，次のものが予定されていた。すなわち，７月２日のベートーヴェン特集では《交響曲第３番「英雄」》（ヘル

ベルト・フォン・カラヤン指揮，シュターツカペレ・ベルリン），７月９日のシューベルト特集では《ピアノ三重奏曲第１番》（演奏者不明）と４曲の歌曲（ハンス・ホッター，マリア・ミュラー，ペーター・アンダース，エルナ・ベルガーによる歌唱），《ロザムンデ》から〈序曲〉と〈間奏曲〉（フルトヴェングラー指揮，ウィーン・フィル），７月16日のブラームス特集では《交響曲第２番》（クナッパーツブッシュ指揮，ベルリン・フィル），７月23日のハイドン特集では《弦楽四重奏曲第77番「皇帝」》（演奏者不明）と《交響曲第100番「軍隊」》（クラウス指揮，ウィーン・フィル），７月30日のシューマン特集では《子供の情景》（エリー・ナイのピアノ），４曲の歌曲（ヴァルター・ルートヴィヒ，ティアナ・レムニッツ，カール・シュミット＝ヴァルターによる歌唱，ミヒャエル・ラオホアイゼンのピアノ），《交響曲第４番》（ヘーガー指揮，シュターツカペレ・ベルリン）である[75]。だが，６月28日の番組編成会議において，プログラムの見直しが行われた。議論となったのは，シューベルトとシューマンの回だった。まず，７月16日に予定されていたクナッパーツブッシュ指揮のブラームスを７月９日，23日のハイドン特集を７月16日に移動することが検討された。しかし，番組はすでに外国にも告知されており，１週間，繰り上げで放送するのではなく，問題の２回分の内容を変更することで話がまとまった[76]。

この議論が求められた理由については，会議の議事録に記されていない。考えられることとして，ゲッベルスが何らかの指示を出してきた可能性がある。そのことを示唆する資料が残されている。先の会議で当該の件が審議された直後に，ゲッベルスとヴェスターマンの面談予定のことが記されている。実際にゲッベルスとヴェスターマンが面談したのは７月３日だが，これを終えた後にゲッベルスが「私は彼に対し，『ドイツの巨匠による不滅の音楽』の時間の番組編成のための私の方針を与える。このように卓越した協力者と頻繁に直接的な連絡を取るのは良いことだ。ヴェスターマンは私に，私の問題提起に感謝している」と日記に書いている[77]。おそらくこの面談においてゲッベルスは，放送日を変更するのではなく，問題の２回を他のコンテンツに差し替えることに同意したのだろう。結局のところ，７月２日[78]，７月16日[79]，７月23日は予定

通りとなり[80]，変更となった7月9日はベートーヴェン特集で《ピアノ・ソナタ第8番「悲愴」》（エリー・ナイのピアノ）と《六重奏曲》（ナイのピアノ，ベルリン・フィルのメンバー）[81]，7月30日はシューベルト歌曲の特集（曲目詳細不明，出演歌手はエルナ・ベルガー，マリア・ミュラー，エミー・ライスナー，ペーター・アンダース，ユリウス・パツァーク，ヴァルター・ルートヴィヒ，ハンス・ホッター，ヴィルヘルム・シュトリエンツ，ピアノ伴奏はミヒャエル・ラオホアイゼン）に落ち着いたのである[82]。なお，予告において示されていなかった7月23日の室内楽曲の演奏者は，シュナイダーハン弦楽四重奏団である[83]。

7月の放送で使用された音源についても，情報が得られた範囲で示しておく。ベートーヴェンに関しては，《英雄》が1944年5月にベルリンの放送スタジオにおける放送用録音[84]，《悲愴》が1944年3月25日の録音で，この収録地として考えられているのはブレスラウである[85]。ブラームスの《交響曲第2番》については，1944年3月26日に放送用に無観客で収録されたとされる音源が現存するが[86]，クナッパーツブッシュによる同曲は1943年12月26日のラジオ番組において放送が確認できる[87]。これも，録音データの再検証が必要なケースと思われる。ハイドンの《軍隊》は1944年4月21/22日にウィーン楽友協会において[88]，《皇帝》は1944年4月15日にウィーンの放送スタジオにおいて[89]，放送のために無観客で収録されたものである。シューベルトの歌曲については，個々の作品を特定することはできないが，ラオホアイゼンの伴奏による歌曲は，シューベルト以外の特品も含めて，膨大な数の録音が残されている。2005年に刊行されたナチス・ドイツ時代の彼の伴奏を集めた歌曲全集はCDにして66枚を数える大部なものとなったが[90]，1944年7月の放送で使用された音源の多くも，このCD全集のシューベルトの巻（これだけでCD14枚分である）に収められていると思われる。

3．ゲッベルスと「ドイツの巨匠による不滅の音楽」

「ドイツの巨匠による不滅の音楽」はゲッベルスの指示により開始されたも

のの，番組開始当初，彼がこのシリーズ構成にどのように関与したかを示す資料は残されていないように思われる。この番組がベートーヴェンの《交響曲第５番「運命」》から始まった必然性を求めるとすれば，以下の体験がゲッベルスに何らかの影響を及ぼした可能性はあるのかもしれない。それは，1944年２月12日，ベルリン大聖堂において，フルトヴェングラーがベルリン・フィルと行った演奏で，まさにこの時に，件の《交響曲第５番》が演奏された。この演奏について，ゲッベルスは次のように感想を述べている。「フルトヴェングラーは，前回，私が聴いて以来，さらにいっそう成熟している。とりわけベートーヴェンの《交響曲第５番》の演奏は，比類のない名人芸である。聴衆は深く心を打たれている」と[91]。この体験が番組を始めるにあたって直接的な契機とはなったかどうかについては判断が分かれようが，少なくとも彼自身の確信を深めることにはなったはずである。

「不滅の音楽」開始後のゲッベルスの動向を見ても，番組制作に際して直接的な指示があったことを示す資料は，前章の最後で見た1944年７月まで存在しない。しかし，彼がこの番組に無関心だったわけではない。彼の日記を読むと，「不滅の音楽」を聴く機会がたびたびあったことが確認できるからだ。しかもその記述には，番組を聴いたという事実の記録にとどまらず，彼の内面を垣間見せるものさえある。この時期のゲッベルスの日記は口述筆記で，この番組については比較的長い記述も残されていることから，これを読むことで饒舌に話をする彼の姿も見えてくるのである。

この章では，これまで検討してきた1944年７月までの番組について，ゲッベルスの日記に記録されている感想を見ることにしよう。そのあとで，ゲッベルスが番組担当者に述べた制作上のコメントを，同年７月の番組編成会議の議事録から拾い出してみたい。

3.1　番組を聴いたゲッベルスの感想

「不滅の音楽」に触発されて述べたゲッベルスの発言内容は，次の２つに大別できる。第一に，彼の音楽的嗜好や音楽理解を述べたもの，第二に，こうし

た見解をベースに，この番組のプロパガンダとしての側面や戦争遂行の必要性へと話題が展開されるもの，である。

第一点に関して，ブルックナーの放送後の感想はこうである。ゲッベルスは，ベーム指揮による《交響曲第７番》を聴いた際，「ウィーン・フィルによる素晴らしい演奏」を「大いに楽しん」だようだ。この後，ゲッベルスは自分のブルックナーの評価を述べる。「ブルックナーは私たちの非常に重要な作曲家の一人」で，「構築的なコンセプトを欠いているせいでベートーヴェンとは比較にならない」ところはあるものの，「旋律の豊かさと賞賛に値する音楽的ファンタジーの広がりを自分のものにしている」点は評価できるという[92]。クナッパーツブッシュ指揮によるこの作曲家の《交響曲第４番》に接したとき，ゲッベルスは「とても美しく，この作品が《ロマンティック》という副題を得るにふさわしい」と感じたが，その一方で「ブルックナーはベートーヴェンやヴァーグナーなどのような，まとめあげる力を有している音楽的才覚の持ち主ではない」とも述べる。なぜなら，「ときおり彼の主題は，みるみるうちに，彼の手元から消えて行ってしまう」ためで，ベートーヴェンのような構成力に秀でている偉大な作曲家と比較してはならないというのである[93]。このように，ブルックナーの評価に際してベートーヴェンが一貫して引き合いに出されていることから，ゲッベルスにとってベートーヴェンは，音楽の価値判断をするための尺度の一つになっていたと言えそうだ。

音楽を愛好したゲッベルスだが，彼の意に沿うものばかりが「不滅の音楽」において取り上げられたわけではなかった。例えば，４月16日のヘンデル特集については，この放送の意義を評価しつつも，その音楽が「あまりにバロック的で，もうかなり歴史的」なものになってしまっており，それほど心に訴えかけてこないものであると認めた[94]。またブラームスも，ゲッベルスは好まなかったようだ。３月に放送されたこの作曲家の特集も，「ブラームスは私の性にあまり合わないことを，あらためて確認」するためのものにしかならなかった。彼はこの番組を最後まで聞かず，ブラームスについて次のような評価を下した。「彼はむしろ構築的な音楽家で，色彩に乏しいのである。この色彩とい

うものは，私が思うに，影響の大きい音楽に備わっているものなのだ」と[95]。

さて，先に述べた第二点に関しては，例えば3月5日のシューベルト・プログラムが該当する。シューベルトの番組は「素晴らしい芸術の喜び」だというのだが，ゲッベルスはこれがどのように大衆にアピールするかを忘れない。「それはきっと，世界中の数百万の音楽愛好家を，ラジオ受信機に引き寄せるだろう」と述べるのだ[96]。3月19日の「素晴らしいベートーヴェン・プログラム」の後には，戦争という現実と国民感情のコントロールに注目し，次のように書く。「こんにちにおいてはまさに，精神的な満足やリラックスが切に求められている。戦争が非常に過酷で深刻であるため，その尋常ならざる心労とバランスをとらねばならない」と[97]。ゲッベルスの理解においてベートーヴェンの音楽は，芸術の価値判断の尺度にとどまらず，戦争という現実においてもアクチュアリティを持つものでもあった。7月9日のエリー・ナイの独奏による《悲愴》を耳にすると，「ベートーヴェンの音楽は，このような時代のためにうってつけのものである」と感じるのである[98]。そして，4月2日にヴァーグナーの《トリスタンとイゾルデ》を感嘆しながら耳にすると，「1時間，これほど美しい音楽を耳にすると，人は生まれ変わったように感じるものだ」という感想を抱く[99]。これは，ナチスの歓喜力行団の趣旨に通じる発言である。

3月12日のバッハの特集については，ゲッベルスはラジオで番組を聴き[100]，その後，ヒトラーと意見を交わしている。ヒトラーの賛同を得られているという自信を背景に，彼はバッハからリヒャルト・シュトラウスへと至るドイツ音楽の作曲家の系譜を次のように描く。「日曜日の夕方のラジオにおける私たちの重要な音楽番組は，彼の全面的な賛同を得る。彼もまた，少数の批判者とは異なり，私たちが番組でバッハをとりあげたことを正しいと思っている。たとえバッハの音楽がこんにちにおいてはしばしば歴史的な感じを与えるにせよ，彼の音楽は私たちの文化的財産の譲渡できない構成要素なのだ。バッハは，いうなれば，ドイツ音楽の構築者である。だが，その音楽には色彩が欠けている。ベートーヴェンとヴァーグナーは，音楽の構築的な理解を踏まえて，とてつもなく色彩的な印象を音楽にもたらす術を心得ていた。同様のことは，ブルック

ナーの場合にも言える。これに対しリヒャルト・シュトラウスは，音楽の構成的な基礎を崩壊させてしまい，きらびやかな色彩描写だけに没頭している。バッハがドイツ音楽の先駆者として登場する一方で，シュトラウスはデカダンスの現れとなっているわけだ。だがそれにもかかわらず，もちろんこれらの音楽家たち全員がドイツ国民の文化的財産で，私たちはいつもできる限り，彼らを保護しなくてはならない」と[101]。ここでゲッベルスは，ドイツ文化を保護することの重要性に話題を展開しているが，この発想を支えていたのは，ドイツ音楽の精髄が徐々に失われつつあるという危機意識であったと思われる。5月7日にハイドンのオラトリオを耳にした時に，彼はこの点を強く意識した。「人は，永遠のドイツ音楽の響きに耳を傾けると，いつもと違う世界に連れ去られるように感じるものだ。けれどもそれは，ゆっくりと消滅しつつある世界なのである」[102]。しかし，まさに「ドイツ」の音楽においてのみ感じ取ることができる，かけがえのない「世界」を守る手段は，戦争を勝利に導くことによって実現できるというのだ。7月30日のシューベルトの歌曲の放送後，次のように発言する。「この機会にあらためて分かるのは，私たちはすべてを守らなくてはならないということ，もし私たちがこの戦争で負けてしまったならば壊れてしまうかもしれない，そうしたすべてを守らなくてはならないということなのだ」と[103]。

3.2　番組案に対するゲッベルスの反応

今度は「不滅の音楽」の番組編成にゲッベルスがどのようにかかわったかという観点から，彼の見解を見ていきたい。ゲッベルスがこの番組編成の際に発言力を強めるのは，先に示したように，1944年7月3日以降と思われる。まさにちょうどこの時期に，番組案に対して示した彼の見解が記録として残されている。7月12日の番組編成会議の議事録に記されている，6つの番組案についての彼の短い所見がそれである。

第1案にあたるゲルハルト・タシュナーの演奏によるヨハン・ゼバスティアン・バッハの《シャコンヌ》については，独奏ソロのための作品であるため，

反対の意が述べられた。第２案のバッハの《カンタータ第80番「われらが神は堅き砦」》（聖トーマス教会合唱団，ギュンター・ラミン指揮）も，選曲として妥当ではないという意見だった。第３案のベートーヴェンの《ロマンス第２番》は，演奏を担当するジークフリート・ボリスがこの番組にふさわしくないという。第４案のヴァーグナー特集，すなわち《ジークフリート牧歌》（カール・エルメンドルフ指揮），《ヴェーゼンドンク歌曲集》（マルガレーテ・テシェマッハーの独唱），さらに《トリスタンとイゾルデ》から〈前奏曲〉と〈愛の死〉（クナッパーツブッシュ）を組み合わせたプログラムについては，統一感の欠如が指摘された。第５案のブルックナーの《弦楽四重奏曲》（シュナイダーハン四重奏団）は，この作品で１時間のプログラムを埋められるかどうか，さらに情報が必要だという。第６案のリヒャルト・シュトラウスの《ばらの騎士》第１幕（クレメンス・クラウス指揮，バイエルン国立歌劇場）に対しては懐疑的だった。ゲッベルスの関心は，「不滅の時間」をオペラの１幕全部で埋めるのではなく，「最も美しい旋律」で満たすことのほうに向いていたのである[104]。

この報告を受けて，番組制作の際にゲッベルスの意見を尊重することが今後の方針とされた。そのため，番組作成案の文書は行間を広めにとり，ゲッベルスに提出するものと放送局用の２部，作成することが求められたのである[105]。この後の番組編成会議においては，おそらく番組担当者との面談で示された方針だけではなく，提出文書への彼の書き込みも活用されたと考えられる[106]。

４．1944年８月以降の番組

前章で見たように，1944年７月以降，ゲッベルスは「不滅の音楽」の制作に大きく関与してくることになるのだが，ここでは1944年８月から，この番組の放送が確認できる1945年２月までの事例について検討を続けたい。番組編成会議における議論やゲッベルスの番組についての感想も，その都度，見ることになる。

4.1　1944年８月の番組[107]

８月６日に放送されたのは，フルトヴェングラー指揮によるヴァーグナーの《ニュルンベルクのマイスタージンガー》から〈前奏曲〉と３幕の歌合戦の場面だった[108]。使用された音源は1943年のバイロイト音楽祭のライヴ録音である。1943年８月にはバイロイト音楽祭における録音という宣伝のもとで４回に分割して全曲が放送されていたが，この「不滅の音楽」での放送に際しては世相が考慮され，公演地はアナウンスされなかった[109]。この公演に出演したのは，フルトヴェングラーのほか，マリア・ミュラー（エーファ，ソプラノ），カミラ・カラプ（マグダレーナ，メゾ・ソプラノ），マックス・ロレンツ（ヴァルター・フォン・シュトルツィング，テノール），ヤロ・プロハスカ（ハンス・ザックス，バリトン），ヨーゼフ・グラインドル（ポーグナー，バス），ベンノ・アルノルト（クンツ・フォーゲルゲザング，テノール），ヘルムート・フェーン（コンラート・ナハティガル，バス），オイゲン・フックス（ベックメッサー，バリトン），フリッツ・クレン（フリッツ・コートナー，バス），ゲルハルト・ヴィッティング（バルタザール・ツォルン，テノール），カール・クロルマン（アウグスティン・モーザー，バス），ヘルベルト・ゴーゼブルッフ（ヘルマン・オルテル，バス），グスタフ・レディン（ウルリヒ・アイスリンガー，テノール），フランツ・ザウアー（ハンス・シュヴァルツ，バス），アルフレート・ドーメ（ハンス・フォルツ，バス），エーリヒ・ツィンマーマン（ダフィト，テノール），エーリヒ・ピーナ（夜警，バス），バイロイト祝祭合唱団，バイロイト祝祭管弦楽団である[110]。

８月13日はモーツァルト特集で，演目は《魔笛》序曲（ヘーガー指揮，シュターツカペレ・ベルリン），《クラリネット協奏曲》（アルフレート・ブュルクナーのクラリネット，クナッパーツブッシュ指揮，ベルリン・フィル），《交響曲第35番「ハフナー」》（ヘーガー指揮，シュターツカペレ・ベルリン）だった[111]。《クラリネット協奏曲》は，1943年３月30日の放送録音とされるものである[112]。《交響曲第35番「ハフナー」》は，1943年10月24日に一度，放送されたことがあるようだ[113]。

８月20日の番組はブルックナーの《交響曲第５番》で，放送時間が15分延長された。フルトヴェングラー指揮，ベルリン・フィルによる演奏である[114]。こ

の音源は，1942年10月のコンサートを収録したもので，1942年11月１日に放送されていた[115]。

８月27日のヨハン・ゼバスティアン・バッハ特集においては，クナッパーツブッシュ指揮，ウィーン・フィルの演奏による《ブランデンブルク協奏曲第３番》,《ヴァイオリン協奏曲第１番》（シュナイダーハンのヴァイオリン），《管弦楽組曲第３番》が取り上げられた[116]。帝国放送ウィーン局からウィーン・フィルに送付された文書によると，《ブランデンブルク協奏曲第３番》と《管弦楽組曲第３番》は1944年６月24日の午前９時30分から12時30分，《ヴァイオリン協奏曲第１番》は同年７月１日の午前10時から12時まで，いずれもウィーン・コンツェルトハウスのモーツァルトザールにおいて収録する計画が立てられていた。この収録が行われた背景には，この種の比較的編成の小さなアンサンブルによる演奏が「特別な共感」を得るため，以前にも増して録音を求める声が大きくなっていたことがあった[117]。この演奏を歓迎した一人がゲッベルスだった。彼はこの放送をすべて耳にし，大いにリフレッシュしたようだ。「音楽の慰めから新しい気力が生み出されるとき，人はまさに生まれ変わったように感じる」と述べている[118]。

4.2　1944年９月の番組

９月の番組については，７月26日の番組編成会議において検討された。審議されたのは，予定されていたベートーヴェンの《ミサ・ソレムニス》の放送に85分を要するため，時間を延長することが可能であるか否か，だった。その結果，今後の方針として，演奏時間の長い作品は，当日のタイムテーブルを変更し，ノーカットで放送することになった[119]。これ以前にも番組の放送時間が延長された事例はあったものの，それが審議された形跡はない。おそらく今回の25分の超過は，許容されるべき程度を超えていたためだったのだろう。件の作品が「不滅の音楽」において取り上げられたのは９月３日で，クレメンス・クラウス指揮，ウィーン・フィルによるものだった[120]。共演したのは，トルーデ・アイッペルレ（ソプラノ），ルイーゼ・ヴィラー（アルト），ユリウス・パ

ツァーク（テノール），ゲオルク・ハン（バス），フランツ・シュッツ（オルガン），ウィーン国立歌劇場合唱団である。放送で使用されたのは1940年11月の放送用録音だが，テープ録音の実用化以前のものであるため，使用されている音源のフォーマットは録音盤だった[121]。音源の再生に際して雑音の混入が避けられない番組ではあったにもかかわらず，演奏のすばらしさを伝えることには支障はなかったようだ。放送を聞いたゲッベルスは「この困難な時代においてとても良い効果をもたらす，真に音楽的な高揚」を感じたという[122]。この放送の音源は，1940年11月24日にオンエアされたことのあるものである[123]。

続く９月10日はシューベル特集では，《八重奏曲ヘ長調》が取り上げられた。演奏したのはシュトロス四重奏団とウィーン・フィルのメンバーで，おそらく1944年４月に行われた演奏会の前後に収録された放送用録音が用いられたと思われる[124]。

９月17日の番組では，モーツァルトの《フィガロの結婚》のハイライトが紹介された。ハンス・シュミット＝イッセルシュテット指揮，ベルリン・ドイツ・オペラによる1942年の放送用録音で，出演歌手はローレ・ホフマン（ケルビーノ，ソプラノ），ルートヴィヒ・ヴィンディッシュ（フィガロ，バリトン），ハンス・ヴォッケ（アルマヴィーヴァ伯爵，バリトン），イルマ・バイルケ（スザンナ，ソプラノ），コンスタンツェ・ネッテスハイム（伯爵夫人ロジーナ，ソプラノ），ヴィルヘルム・ラング（ドン・バルトロ，バス），ゲオルク・ゲルハルト（ドン・バジーリオ，テノール）である。現存する音源として第６，10，12，17，28，29曲が残されており，これらがこの放送で用いられた可能性は高いものの，この演奏時間は合計で35分ほどにすぎない[125]。したがって，これ以外の部分も「不滅の音楽」において放送されたと考えるべきだろう。

９月最後の番組（９月24日）は，シューマン特集となった。曲目は《ピアノ協奏曲》（ヴァルター・ギーゼキングのピアノ，ベルリン・フィル）と《交響曲第４番》（シュターツカペレ・ベルリン）で，２曲を指揮したのはローベルト・ヘーガーだった[126]。《交響曲第４番》は1943年７月25日に放送されたものである[127]。《ピアノ協奏曲》のほうは，現存するテープの情報から，1944年７月にバーデ

ン・バーデンにおいて収録されたことが確認できる[128]。

4.3　1944年10月の番組

10月の番組編成にあたっては，確定するまでに多くの議論が必要となったようだ。この月の番組について番組編成会議で議論が行われたのは9月6日だが，議事録によるとエルメンドルフとヘーガーは承認で，レーンのヴァイオリン演奏は変更されるという[129]。『帝国放送』に掲載された10月の番組予告によると，ブルックナー特集の10月1日には《交響曲第6番》（カール・エルメンドルフ指揮，シュターツカペレ・ドレスデン），ベートーヴェン特集の10月8日には《ピアノ・ソナタ第23番「熱情」》（ギーゼキングのピアノ），歌曲集《遥かなる恋人に寄す》（ペーター・アンダースのテノール），《弦楽四重奏曲第8番》（シュトロス四重奏団），ブラームス特集の10月15日には《ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲》（ベーム指揮，ウィーン・フィル，シュナイダーハンのヴァイオリン，クロチャクのチェロ），《祝辞と格言》（クラウス指揮，ウィーン国立歌劇場合唱団），ハイドン特集の10月22日には《四季》から〈秋〉と〈冬〉（クラウス指揮，ウィーン・フィル），リヒャルト・シュトラウス特集の10月29日には《ドン・ファン》と《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》（この2曲は作曲者の指揮，ウィーン・フィル），さらにこの2曲の間に《ブルレスケ》（エリー・ナイのピアノ）が計画されていた[130]。この予告が示すように，却下となったレーンの演奏ばかりではなく，ヘーガーの出演する回も最終案の作成までには見直しとなったのである。実際の放送は，10月1日[131]，8日[132]，15日[133]の3回については，予定通りに進んだようだ。10月22日は，《四季》の〈秋〉のみが放送された[134]。一方，計画通りにならなかったのは10月29日である。当月内に予定されていた《ブルレスケ》の収録が実施できなかったからである[135]。そのため，この日の曲目は，このシリーズの第1回でも取り上げられたフルトヴェングラー指揮によるベートーヴェンの《交響曲第5番「運命」》に変更された[136]。

放送された曲目のうち，録音データが得られたものを示すと，《遥かなる恋人に寄す》はミヒャエル・ラオホアイゼン伴奏で1944年9月23日[137]，《熱情》

は1944年７月から８月[138]，《弦楽四重奏曲第８番》は1942年[139]，《二重協奏曲》は1943年[140]，《四季》のは前述のとおり1942年の収録である。これ以前に放送が確認できたものは，《運命》のほかに，《四季》の〈秋〉（1943年９月26日放送）[141]，《二重協奏曲》（1943年10月10日放送）が挙げられる[142]。

10月の「不滅の音楽」のうち，ゲッベルスが実際に放送を聞いたのは，ブルックナーとベートーヴェンの回である。ブルックナーの演奏には「深く心を打たれる」ものがあり[143]，ギーゼキングの《熱情》には「形式が完成された」印象を抱いた。だが，ベートーヴェンの演奏を聴き進めるにつれ，「このような美しい世界がどれほど遠く縁遠い」ものであるかについて，ふたたび考えを巡らせたようだ。「人は，内面において，このような世界から完全に距離を置いてしまっている。戦争の不安と負担があまりに重く人の心に圧迫しており，人生のより素晴らしい側面を，もはやほとんど理解しない」と述べている[144]。

4.4　1944年11月の番組

11月分の番組案は，９月６日の会議においては，数日中に提出することが求められていたものの[145]，実際にゲッベルスの手元に届けられたのは月末である。この文書に関しては，残されているのは添え書きのみで，肝心の番組案のほうは失われている[146]。

これまでたびたび情報の典拠としてきた『帝国音楽』は，1944年11月以降，刊行されていない。そのため本稿の以下の記述は，複数の新聞のラジオ番組欄，番組編成会議の議事録，現存する音源等の情報によるものである。

この月のコンテンツはすべて，「不滅の音楽」において初めて公開されたと思われる。

11月５日の特集はグルックとヘンデルで，演奏者はマルガレーテ・クローゼ，ヘルマン・アーベントロート指揮，ベルリン・フィルである[147]。この日の曲目は，現存する音源（1944年９月20/21日収録）から推測するに，ヘンデルの《アウリスのイフィゲニア》序曲[148]，《合奏協奏曲》作品６-６と《エジプトのジュリアス・シーザー》から〈夜は青く〉，グルックの《オルフェオとエウリ

ディーチェ》からの３曲（〈復習の女神たちの踊り〉〈私は彼女を失った〉〈精霊の踊り〉）であったと思われる[149]。

11月12日のヴァーグナー特集においては，《ヴァルキューレ》第１幕が放送された。出演した歌手はマックス・ロレンツ，マルガレーテ・テシェマッハー，クルト・ベーメ，指揮者はカール・エルメンドルフだった[150]。シュターツカペレ・ドレスデンがオーケストラを担当したこの演奏は，1944年９月21日にドレスデンにおいて放送用に録音されたものである[151]。

11月19日に放送されたのはブルックナーの《交響曲第８番》で，演奏したのはヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮，ウィーン・フィルである[152]。この音源はこの前月にウィーンにおいて放送用に収録された[153]。当初この日に放送が予定されていたのは，カラヤンの指揮による同曲だったが[154]，指揮者が難色を示したため，フルトヴェングラーのテープがオンエアされた。

11月最後の「不滅の音楽」の放送（11月26日）は，ブラームスの作品だった。曲目は《悲劇的序曲》と《ピアノ協奏曲第２番》で，ソリストにはヴァルター・ギーゼキングが迎えられた。ローベルト・ヘーガー指揮，ベルリン・フィルがオーケストラを担当した[155]。この放送で使用された音源のうち，《ピアノ協奏曲第２番》の第１楽章と第２楽章は現存している。収録は1944年７月，バーデン・バーデンにおいて行われた[156]。

11月の番組についてのゲッベルスの感想も，ここで見ておきたい。彼が聴いたのはヴァーグナーとブルックナーの回である。前者については，エルメンドルフの演奏に「ドレスデン国立歌劇場の芸術の卓越した仕事」を見出した[157]。後者については，以前とは異なり，「やはりブルックナーは，偉大な交響曲作曲家の一人には数えられない」と述べる。そして，この作曲家の構築的な能力の欠如をベートーヴェンを引き合いに出しながら，強い調子でこう指摘する。「彼には，統合するコンセプトが欠けている。彼の音楽には天才的で独自の思い付きが混じっているのだが，これらを統一的で構築的なかたちにまとめ上げることがほとんどうまくいかないのである。したがって，例えばベートーヴェンと同列に並べるのは，正しくない。ベートーヴェンからブルックナーまでは，

非常に遠い道のりなのだ」[158]。これと同じ演奏について当時のベルリンの批評家は，「主題の表現の情熱的な大きさを響きの中に移し替える」ことが成功していると指摘したのだが[159]，ゲッベルスはこのような熱狂に身を置くことはなかったのである。

4.5　1944年12月と1945年１月元旦の番組

12月の番組案は，10月17日にゲッベルスに提出された。この月に取り上げられる作曲家はヴァーグナー，ハイドン，ベートーヴェン，ブルックナー，シューベルトだという（曲目と演奏家は不明）[160]。放送までに時間があったため，クリスマスや年末・年始の特別番組編成とのバランスも考慮しつつ，番組案の検討が行われた。ゲッベルスからの回答を受けて，この時期の番組について番組編成会議で審議が行われたのは11月29日である。「不滅の音楽」に関する最初の議題は，12月の最後の２回（12月24日と12月31日）の放送日である。デンマークのラジオ局がこの日の放送を中継できないため，12月25日と１月１日（いずれも月曜日）にずらすことになった。次いで番組で放送される演目が審議された。クリスマスの「不滅の音楽」で計画されていた演目は，ベートーヴェンの《交響曲第６番「田園」》と《エグモント》序曲だった。ところがゲッベルスは，バッハの《クリスマス・オラトリオ》と，ウィーン少年合唱団のような著名な合唱団による〈きよしこの夜〉などのクリスマス・ソングを，当初予定されていた12月24日（23時から24時）ではなく，25日の「不滅の音楽」の枠内においてオンエアすることを望んだ。この件についてはゲッベルスの提案が採用された。続けて，元旦の「不滅の音楽」の曲目が議論された。ゲッベルスはブラームスの《交響曲第３番》ではなく，リストの作品を望んだ。この提案には，番組担当者のヴェスターマンが反対した。元旦の番組としてリストは妥当ではないというのである。この日の番組については，原案のまま，クナッパーツブッシュ指揮によるブラームスの《交響曲第３番》と決まった[161]。

12月と１月１日の「不滅の音楽」の時間に放送されたものは，次のとおりである。

12月3日：ベートーヴェン特集，《フィデリオ》第2幕，ベーム指揮，ウィーン・フィル[162]。出演歌手は，トミスラフ・ネラリック（ドン・フェルナンド，バリトン），パウル・シェフラー（ドン・ピツァロ，バリトン），トロステン・ラルフ（フロレスタン，テノール），ヒルデ・コネツニ（レオノーレ，ソプラノ），ヘルベルト・アルゼン（ロッコ，バス），イルムガルト・ゼーフリート（マルツェリーナ，ソプラノ），ペーター・クライン（ヤキーノ，テノール），ヘルマン・ガロス（第一の囚人，テノール），ハンス・シュヴァイガー（第二の囚人，バリトン），ウィーン国立歌劇場合唱団である[163]。この音源は1944年2月7～9日にウィーンにおいて収録され，これ以前にも放送されたことのあるものである[164]。

12月10日：ハイドン特集，《チェロ協奏曲ニ長調》（ルートヴィヒ・ヘルシャーのチェロ），《交響曲第94番「驚愕」》，クレメンス・クラウス指揮，ベルリン・フィル[165]。この2曲は，この前の月に収録が行われたもので，この時が初公開だった[166]。

12月17日：ベートーヴェン特集，《ピアノ協奏曲第5番「皇帝」》（エリー・ナイのピアノ），交響曲第1番，ヘルマン・アーベントロート指揮，ベルリン・フィル[167]。この放送で使用された音源のうち，《皇帝》は今も残されており，収録日は1944年10月13日とされている[168]。これもこの番組において初めて公開された録音である。この月に彼が耳にしたのはこの回だけで，「精神を高揚させる喜び」と感想を述べている[169]。

12月25日：ヨハン・ゼバスティアン・バッハ特集，《クリスマス・オラトリオ》，ギュンター・ラミン指揮，聖トーマス教会合唱団，ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団，エリカ・ロキタ，ローレ・フィッシャー，ハインツ・マルテン，フレート・ドリッセン[170]。この音源についての詳細は不明である。ゲッベルスが提案したクリスマス・ソングは，新聞の番組情報において確認することはできなかった。

1945年1月1日：ブラームス特集，《交響曲第3番》，クナッパーツブッシュ，ベルリン・フィル[171]。この録音については，ブルックナーの《交響曲第4番「ロマンティック」》のところでも述べたように，ダビングされた日のみが伝え

られている。収録日については更なる調査が必要である。

4.6　1945年１月７日以降の番組

新聞で「不滅の音楽」の放送が確認できるのは，２月18日の分までである。そのデータは以下のとおりである。ゲッベルスの感想も２回分，残されているので，それもここに示したい。

１月７日：シューベルト特集，《ロザムンデ》から間奏曲とバレエ音楽，歌曲〈全能の神〉，歌曲〈君はわが憩い〉，歌曲〈セレナーデ〉（ヒルデ・コネツニのソプラノ），《５つのドイツ舞曲》，ベーム指揮，ウィーン・フィル[172]。この収録は，1944年９月，コンツェルトハウスにおいて行われた。

１月14日：モーツァルト特集，《イドメネオ》序曲，《ピアノ協奏曲イ長調》（ヴァルター・ギーゼキングのピアノ），《交響曲ト長調》（メヌエットは省略），ヘーガー指揮，ベルリン・フィル[173]。

１月21日：ベートーヴェン特集，《交響曲第３番「英雄」》，フルトヴェングラー指揮，ウィーン・フィル。この放送は，この回から始められた「不滅の音楽」内におけるフルトヴェングラー・シリーズ（毎月第３日曜日）の初回となった[174]。使用された音源は，1944年12月20日にウィーン楽友協会大ホールにおいて収録されたものである[175]。ゲッベルスはこの番組を聴き，「そこに耳を傾けて開かれてくるのは，なんという世界だろう！この世界の中へ身を沈めることは，なんとすばらしく，また，元気づけてくれることか!」と日記に書いている[176]。

１月28日：リヒャルト・シュトラウス特集，《ドン・ファン》（作曲者の指揮），《ブルレスケ》（ヴィンフリート・ヴォルフのピアノ），《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》（以上２曲は，クレメンス・クラウス指揮），オーケストラは３曲ともウィーン・フィル[177]。《ドン・ファン》は1944年６月15日[178]，《ブルレスケ》は1944年10月30日，《ティル》は1944年10月26日の録音である[179]。

２月４日：ヨハン・ゼバスティア・バッハ特集，《トッカータとフーガ ニ短調》（ギュンター・ラミンのオルガン），《フーガの技法》（カラヤン指揮，リンツ・帝

国ブルックナー管弦楽団)[180]。《フーガの技法》は1944年12月14日にリンツ市立劇場において無観客で放送用に収録された[181]。このオーケストラがこの放送シリーズに登場したのはこの時だけである。ゲッベルスが「不滅の音楽」を耳にしたことが直接的に確認できるのは，このバッハが最後である。彼は仕事中にこの放送を聴き，「この仕事がラジオで放送されるヨハン・ゼバスティアン・バッハの音楽によって支えられるとき，それは異質なものになってしまった世界からのあいさつのようなものになる。そのような貴重な精神的な喜びを楽しむことができる時代は遠く，ほとんど想像できない」と感想を述べている[182]。

２月11日：ヴァーグナー特集，《さまよえるオランダ人》第２幕，クラウス指揮，バイエルン国立歌劇場[183]。出演歌手はゲオルク・ハン（ダーラント，バス），ヴィオリカ・ウルズレアク（ゼンタ，ソプラノ），カール・オスタータック（エリック，テノール），ルイーズ・ヴィラー（マリー，アルト），フランツ・クラルヴァイン（舵取り，テノール），ハンス・ホッター（オランダ人，バリトン），バイエルン国立歌劇場合唱団である[184]。これは1944年３月13日から15日にかけて放送用に収録され[185]，同年５月４日に第１幕[186]，５月７日に第２幕と第３幕が放送されたことのあるものだった[187]。1945年１月から２月にかけての「不滅の音楽」シリーズにおいてコンテンツの再利用が行われたのは，この《オランダ人》だけである。

この番組の情報として確認できる最後のものは，２月18日のブルックナー特集である。曲目は《交響曲第９番》で，フルトヴェングラー指揮，ベルリン・フィルによるものだった[188]。この放送は，フルトヴェングラー・シリーズの第２回ということになる。ベルリン・フィルの内部文書によると，この録音は1944年10月３日から７日に行われ，完成までに合計19時間30分を要したという[189]。

５．結びに

以上が資料によって踏査できる「不滅の音楽」の全容だが，これをもとに統計的なデータをまとめてみたい。数字のカウント方法は，各番組への登場回数

とする。したがって，例えばある番組内で同一演奏家による複数の演奏があった場合でも，カウントは１回である。

まず，作曲家を見ると，「ドイツの巨匠による不滅の音楽」と命名されただけのことはあり，番組放送当時の「ドイツ」の作曲家，つまりバッハ，ヘンデルから，リヒャルト・シュトラウスまでがカバーされている。最多はベートーヴェンの11回，次点はブラームスとブルックナーの６回である。この次がモーツァルトとシューベルトの５回，バッハ，ハイドン，ヴァーグナーの４回である。演奏曲目は，ベートーヴェン特集で《交響曲第３番「英雄」》がカラヤンとフルトヴェングラーで放送されたことを除けば，重複はない。また，番組の内容変更で混乱があった７月以外で，同一の作曲家が２週続けて特集されることもなかった。クリスマスの番組編成のところで，素案でみればふたたびベートーヴェンが２回続く可能性はあったが，最終的にバッハの《クリスマス・オラトリオ》になった。全体としてみれば，ヴァリエーションを作ることに意識が向けられていたと言えるだろう。

作曲家の選択という観点で見ると，全体としてドイツ・ロマン派の作品が取り上げられる傾向が強い。当時，ドイツの楽壇で評価の定まった作曲家はほかにもいたにもかかわらず，存命中の人で特集が組まれたのはリヒャルト・シュトラウスただ一人である。一般の人気を得るには，例えばヨハン・シュトラウスは極めて有効であっただろうが，番組の性格とは異なるという判断ゆえか，ただ１度の放送を数えるにとどまった。

今度は演奏家のデータを見てみたい。

出演回数が最も多かったのは，ベルリン・フィルの20回である。次いでウィーン・フィルの15回，シュターツカペレ・ベルリンで７回である。このことは，「不滅の音楽」においてはバラエティに富んだ番組編成が行われていたとはいえ，オーケストラ作品が主軸を成していたことを物語っている。実際，指揮者の出演回数は多い。ソリストとしての最多出演者はギーゼキングの５回であるのに対し，指揮者の場合，フルトヴェングラー11回，クラウス９回，ヘーガー８回，クナッパーツブッシュ７回，ベーム６回，アーベントロート５

回である。

ソリストの出演回数に目を向けると，先のギーゼキングに次ぐ出演回数だったのは，ラオホアイゼン，パツァーク，ハンの４回である。ラオホアイゼンは，歌曲の伴奏者や室内楽の共演者として出演していた。ラオホアイゼン以外の２人は歌手だが，クラウスが好んで共演者にしていたため，出演回数が多いのだ。アイッペルレの３回も同様である。歌手で出演回数３回を数えるのは，ほかにホッター，ロレンツ，クローゼがいる。ロレンツは，ヴァーグナー歌手として著名だったため，《トリスタンとイゾルデ》，《マイスタージンガー》，《ヴァルキューレ》のすべてに出演している。器楽の独奏者で３回出演しているのはナイ，シュナイダーハン，ラミンである。ナイはギーゼキングとともに，ドイツのピアノ界を牽引する一人だったことがこの数字からもわかる。シュナイダーハンはソリストとしての出演は３回だが，四重奏団のメンバーとしての出演がほかに１回ある。彼がウィーン・フィルのコンサートマスターであることも考慮すると，ドイツのヴァイオリン演奏において，独特の存在感を示していたことがうかがえる。ラミンの出演回数は３回だが，内訳は指揮者として１回，オルガン奏者として２回である。彼はバッハとヘンデルの回に出演しており，この分野の第一人者だった。

注目されるのは，この統計データで言及した出演者たちは全員，1944年に作成された「天賦の才能を持つ芸術家リスト」に掲載されているということだ[190]。このリストは，1944年９月１日から実行された劇場封鎖の際に作成されたものである。「不滅の音楽」に彼らが頻繁に出演していたことは，この番組のコンセプトで示されていた傑出した音楽家の起用が，忠実に実行されていたことを物語っている。

ところで，本稿で検証した「不滅の音楽」の最後の放送は1945年２月18日だが，その後はどうなったのか。この点について述べて，本稿の結びとしたい。

残された内部文書を見ると，制作サイドにおいてはゲッベルスに助言を求めつつ，番組をさらに充実することが模索されていたようだ。例えば，1944年11

月14日，ハンス・フリッチェはゲッベルスに対し，「不滅の音楽」で使用する協奏曲の録音について指示を仰いでいる。この文書においては，これまでにこの番組において放送された曲目に加え，この時点で放送が予定されているもの，さらに収録が予定されているものについてもリストが作成されている。それによると，収録済みで放送予定のあるものはブラームスの《ピアノ協奏曲第２番》（ヴァルター・ギーゼキング），モーツァルトの《ヴァイオリン協奏曲第３番》（エーリヒ・レーン），ベートーヴェンの《ピアノ協奏曲第５番「皇帝」》（エリー・ナイ），モーツァルトの《ピアノ協奏曲ハ長調》と《ピアノ協奏曲イ長調》（いずれもギーゼキング），収録が予定されているものはハイドンの《チェロ協奏曲第２番》（ルートヴィヒ・ヘルシャー），ベートーヴェンの《ピアノ協奏曲第３番》（エドゥアルト・エルトマン）と《ピアノ協奏曲第４番》（コンラート・ハンゼン），ブラームスの《ヴァイオリン協奏曲》（ゲオルク・クーレンカンプ），ブルッフの《ヴァイオリン協奏曲第１番》（ゲルハルト・タシュナー），シュポーアの《ヴァイオリン協奏曲》（ジークフリート・ボリス），バッハの《ヴァイオリン協奏曲第２番》（ジークフリート・ボリス，エーリヒ・レーン），シューマンの《チェロ協奏曲》（ヘルシャー），モーツァルトの《ピアノ協奏曲第20番》（ヴィルヘルム・ケンプ），リヒャルト・シュトラウスの《ブルレスケ》（ギーゼキング）である[191]。この中には，1945年２月18日までに放送されたものも散見されるが，その多くは番組においてどのように活用されたか，把握できないのが現状だ。重要なのは，これほど多くのコンテンツが「不滅の音楽」のために準備されていたということである。なお，収録計画の演目のうち，ブルッフの《ヴァイオリン協奏曲第１番》は，1944年12月16日にアーベンロート指揮，ベルリン・フィルで録音が行われた[192]。シューマンの《チェロ協奏曲》については，1945年１月27日にティボル・デ・マヒュラをソリストとするベーム指揮，ベルリン・フィルによる放送用録音が行われており[193]，これをヘルシャーとの計画を変更したものとみなすことができるかもしれない。このシューマンの《チェロ協奏曲》は，「不滅の音楽」の時間ではなく，３月16日金曜日の21時から，ハイドンの交響曲とともにオンエアが計画されていた[194]。

また，この番組に起用される演奏家についても，積極的に新しい人脈を開拓する空気があったことも指摘しておきたい。1944年12月，ハンブルクの大管区長カウフマンが，ハンブルク・フィルを「不滅の音楽」に起用することをゲッベルスに提案してきた。この頃，この番組に出演するオーケストラと指揮者を決めていたのはゲッベルスだったためである。実際のところ，この番組に登場するオーケストラは特別階級のベルリン・フィルとウィーン・フィル，あるいはそれに次ぐ格付けの団体に限られていた。しかし，プラハ・ドイツ・フィル（ヨーゼフ・カイルベルト指揮）とハンブルク・フィル（オイゲン・ヨッフム指揮）は目覚ましい成果を上げているため，ドイツ・オペラ・ハウスのオーケストラやライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団とともに，番組に出演することを提案するというのである[195]。ゲッベルスはこの案に興味を示した[196]。最終的にこの件がどう決着したかについては，文書によっても，放送記録によっても確認できない。仮にこの提案の運用が決まっていたとしても，終戦までに実現せずに終わったというのが実情だろう。

1945年２月25日以降の「不滅の音楽」の番組内容については，現在までの調査において詳細を確認できない。だが，先に述べた1945年３月のシューマンの放送の事例にもあるように，ドイツ帝国放送協会はこの先も音楽番組の送信を続けていた。リンツ・帝国ブルックナー管弦楽団に関する研究によると，同オーケストラによる放送用録音は1945年４月１日に帝国プログラムにおいて放送される予定があったという[197]。このことから「不滅の音楽」も，新聞において情報が得られない時期であっても，計画的に放送されていた可能性があるのだ。番組編成会議の議事録には，同年４月頃までの素案が作成されていたことをうかがわせる記述が認められる。その一つは，1944年12月13日の番組編成会議の議事録である。シェーニッケが提出した案にJ.S.バッハの《マタイ受難曲》が含まれていたものの，演奏に２時間半を要するため，彼自身，この選曲を妥当とみなしていないと述べたことが記録されている[198]。《マタイ受難曲》の放送があるとすれば，1944年の事例に従えば聖金曜日である[199]。1945年の復活祭は４月１日（日曜日）であるため，番組案はこの日のものということが言

えそうだ。もう一つの記録は，1945年２月21日の議事録である。この日の報告事項として，３月の放送予定が作成され，ゲッベルスの承認が得られたとされている。その際，ゲッベルスによる将来の希望として，シュナイダーハン四重奏団のような著名なアンサンブルをプログラムに入れることが述べられている。ただし，同じウィーンの団体でも，ウィーン・コンツェルトハウス四重奏団は除外すると書き添えられている[200]。これまで見てきたように，「不滅の音楽」には評価の高い演奏家が起用されたため，比較的若いメンバーで構成されていたアンサンブルでは任に堪えないとされたのだろう。それだけ「不滅の音楽」というブランドに，ゲッベルスは最後までこだわりを見せたのである。

＊本研究はJSPS科研費JP26770071, JP17K02378, JP21K00218の助成を受けたものである。

注

1 本研究にあたっては，以下の図書館およびアーカイブから資料（文書・データ・録音）を提供していただいた。ここに記して，感謝したい。ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団歴史アーカイブ，オーストリア国立図書館，オーストリア放送協会，ドイツ放送アーカイブ，ドイツ連邦公文書館，バイエルン州中央公文書館，バイエルン放送協会，ベルリン・ブランデンブルク放送協会。

2 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 22. 2. 1944, S. 4.

3 Bundesarchiv (BA). R 55/696. Protokoll Rundfunksitzung am 17. 6. 1943.

4 BA. R 55/696. Protokoll Rundfunksitzung vom 24. Juni 1943.

5 BA. R 55/696. Rundfunk-Sitzung am 14. Juli 1943.

6 BA. R 55/696. Rundfunksitzung v. 28. 7. 43.

7 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 3. 8. 1943, S. 6.

8 Znaimer Tagblatt, 2. 8. 1943, S. 4.

9 Reichsrundfunk, Jahrgang 1943/44, Heft 5 (August 1943), S. 97-99.

10 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 7. 9. 1943, S. 6; Reichsrundfunk, Jahrgang 1943/44, Heft 6 (September 1943), S. 120-122.

11 BA. R 55/1254. Hinkel an dem Herrn Reichsminister, 30. 8. 1943. この資料では「アルフレート・イェルガー」とされているが，本文でも示したように，正しくは「ヴィルヘルム・イェルガー」である。

12 Reichsrundfunk, Jahrgang 1943/44, Heft 7（Oktober 1943）, S. 143.『フェルキッシャー・ベオバハター』ベルリン版では番組タイトルのみの紹介で，曲目等は不詳である。Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 5. 10. 1943, S. 6.

13 Kleine Volks-Zeitung, 21. 3. 1944, S. 6.

14 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 16. 1. 1944, S. 5. 本稿の作成にあたり，ベルリン・フィルの演奏会データ，フルトヴェングラーの演奏会データ，フルトヴェングラーの音源の収録日については，注記がない場合，以下の情報に基づいている。Peter Muck: Einhundert Jahre Berliner Philharmonisches Orchester. Tutzing（Hans Schneider）1982, Bd. 3; René Trémine: Wilhelm Furtwängler. Concert listing 1906-1954, Bezons（Tahra Productions）1997; René Trémine: Wilhelm Furtwängler. A Discography, Bezons（Tahra Productions）1997. なお，フルトヴェングラーの音楽番組に関しては，ヘニング・スミスによるリサーチを参照した。Henning Smidth: Wilhelm Furtwängler Broadcasts & Broadcast Recordings 1926-1954（PDF）. http://www.smidth.dk/furt/furt.html（アクセス日：2022年９月23日） このリサーチは，フルトヴェングラーの放送データを網羅的に集めたものとして注目に値するものだが，ドイツ帝国放送協会の番組に関しては，ドイツ語圏の新聞等において情報の裏付けが得られないもの，演奏会記録から曲目を推定したと思われるもの，さらに，明らかな誤りも含まれている。本稿で放送日に言及する場合には，スミスの情報を直接の典拠とはせず，放送当時の資料で裏付けが得られたものに限った。

15 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 23. 1. 1944, S. 5.

16 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 13. 2. 1944, S. 3.

17 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 22. 3. 1944, S. 3.

18 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 22. 2. 1944, S. 4.

19 1943年６月末に収録されたフルトヴェングラーとベルリン・フィルによるベートーヴェンの作品（《コリオラン》序曲，《交響曲第４番》，《交響曲第５番》）は，1943年７月４日の「ベートーヴェン・コンサート」（Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 4. 7. 1943, S. 5），あるいはこの翌週（７月11日）の「ベートーヴェンの交響曲」を放送する番組において放送されたと思われる（Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 11. 7. 1943, S. 5）。いずれも，演奏者としてフルトヴェングラー指揮，ベルリン・フィルとクレジットされているものである。当日の新聞で曲目は特定できないのだが，『帝国放送』の予告によると，《運命》は７月11日，《交響曲第４番》は７月４日の放送である。ただし，この予告においては，７月４日のもう一曲はベートーヴェンの《献堂式》序曲とされている。Reichsrundfunk, Jahrgang 1943/44, Heft 4（Juli 1943）, S. 80f. このベートーヴェンの《交響曲第５番》に限らず，本稿で言及するフルトヴェングラーとベルリン・フィルの録音はすべて現存している。2019年にナチス・ドイツ時代の彼らの演奏による音源を集めたCD全集「フルトヴェングラー 帝国放送局（RRG）アーカイヴ 1939-45」が日本においても発売された（King International，CD番号：KKC5952）。

20 Reichsrundfunk, Jahrgang 1943/44, Heft 8（November 1943）, S. 163.

21 ベートーヴェンの《チェロ・ソナタ第３番》の録音データはドイツ放送アーカイブ（DRA）の資料に基づく（DRA. K000514045）。DRA の音源はオリジナルからコピーしたものだが，保存状態が悪く，今回試聴した録音でも，劣化したオープンリールテープが再生機の金属部分に接触した際に摩擦によって生じる歪（いわゆるテープ鳴きによるノイズ）と思われるものが混入していた。

22 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 22. 2. 1944, S. 4.

23 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 27. 2. 1944, S. 5. この新聞の情報によると，当日は放送時間を10分延長していた。この放送で使用された音源は，LP レコードや CD で発売されたことがある（例えば Preiser，CD 番号：90192，Ⓟ1994）。

24 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 5. 3. 1944, S. 5. 歌曲と室内楽の作品名は，以下による。Reichsrundfunk, Jahrgang 1943/44, Heft 12（März 1944）, S. 248. 同日放送の３曲は，LP レコードで発売された。以下はその情報である。《音楽に寄せて》（Melodiya，レコード番号 M10-40949-50，1970年代の発売），《ます》（Melodiya，レコード番号 M10 46077 005，1986年発売），《未完成》（Urania，レコード番号 URRS 7-9，1950年代の発売）。なお，本稿における歌曲の伴奏者 Raucheisen の日本語表記は，長く親しまれてきた「ラウハイゼン」ではなく，原語に近い「ラオホアイゼン」としたことを，ここで断っておきたい。

25 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 31. 10. 1943, S. 5.

26 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 10. 10. 1943, S. 5; Reichsrundfunk, Jahrgang 1943/44, Heft 7（Oktober 1943）, S. 143.

27 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 2. 8. 1943, S. 6; Reichsrundfunk, Jahrgang 1943/44, Heft 5（August 1944）, S. 97f. 《帝国放送》の記事からは，演目を明確に特定することが難しいのだが，シューベルトの変奏曲の例として同曲が挙げられている。

28 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe，1. 3. 1944, S. 4. ヴァイオリン協奏曲の独奏者は，2000年に発売されたナチス・ドイツの放送録音を集めた CD（Historic Unissued Recordings of the German Radio（RRG）1939-45）に収録されている同曲の録音データによる（Tahra, CD 番号：TAH 382/5）。ただし，この情報でも《ヴァイオリン協奏曲》の録音データは不明である。

29 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 7. 3. 1943, S. 5; Reichsrundfunk, Jahrgang 1942/43, Heft 25（7. März 1943）, S. 493.

30 《音楽の捧げもの》の音源は現存している（DRA. K000494459）。

31 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 28. 3. 1943, S. 5; Reichsrundfunk, Jahrgang 1942/43, Heft 26（21. März 1943）, S. 517.

32 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 19. 3. 1944, S. 4f.

33 ベートーヴェンの《ピアノ・ソナタ第14番「月光」》の録音データは，DRA より提供された資料に基づく（DRA. K000395236）。第二次大戦末期のギーゼキングのピア

ノによる《月光》の放送用録音として，1944年10月3日収録とするものがCDで刊行されている（Music and Arts Programs of America，CD番号：CD-1070，Ⓟ2000）。ギーゼキングによる同曲の録音は，旧ソ連に接収された録音テープにも含まれているが，収録データは不詳である。Bärbel Böhme und Wolfgang Adler: Musikschätze der Reichs-Rundfunk-Gesellschaft. Die Rückkehr von ca. 1.500 Tonbändern aus Moskau ins Berliner “Haus des Rundfunks”, Berlin（Sender Freies Berlin Schallarchiv）1992, S. 30. 接収テープに基づくLPレコードも，旧ソ連において1960年ごろに発売された（Melodiya，レコード番号：D 10165-10166）。論者が比較したところ，DRA提供の音源，CD化された音源，それからLPレコードの音源は同一である。

34 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 16. 5. 1943, S. 5.

35 Reichsrundfunk, Jahrgang 1943/44, Heft 2（Mai 1943）, S. 37.

36 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 26. 3. 1944, S. 5.

37 Reichsrundfunk, Jahrgang 1942/43, Heft 8（12. Juli 1942）, S. 164.

38 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 19. 12. 1943, S. 5. 1943年12月に開催されたフルトヴェングラーとベルリン・フィルのコンサートにおいては，本文で言及した2曲のほか，ブラームスの《ピアノ協奏曲第2番》も演奏されている（ソリストはアドリアン・エッシュバッハー）。この作品については，1944年1月2日に放送されたことが番組表によって確認できる。Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 1/2. 1. 1944, S. 5.

39 Reichsrundfunk, Jahrgang 1943/44, Heft 12（März 1944）, S. 248.

40 1996年にCD化された，この音源の情報による（Preiser，CD番号：90243）。

41 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 27. 6. 1943, S. 5.

42 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 11. 7. 1943, S. 5.

43 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 22. 5. 1943, S. 6.

44 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 27, 5, 1943, S. 6.

45 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 3. 6. 1943, S. 6.

46『帝国放送』によると，当初，放送が予定されていたのはローベルト・ヘーガー指揮によるヴァーグナーの《ローエングリン》だった。Reichsrundfunk, Jahrgang 1943/44, Heft 2（Mai 1943）, S. 37f.

47 録音情報や現存する音源等については，拙稿「総力戦下のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団――1943／44年のシーズンにおけるクレメンス・クラウスとカール・ベームの指揮によるラジオ放送番組に関する研究――」（『桜文論叢』第96巻，2018年），507-508頁。

48 Reichsrundfunk, Jahrgang 1944/45, Heft 1/2（April 1944）, S. 17.

49 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 14. 5. 1944, S. 5.

50 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 16. 4. 1944, S. 5; Reichsrundfunk, Jahrgang 1944/45, Heft 1/2（April 1944）, S. 17. クナッパーツブッシュによる演奏曲

目は，2011年に CD 化された音源の情報に基づく（Dreamlife，CD 番号：DLCA-7032）。この日に放送された音源のうち，この曲以外で現存が確認できたのは《クセルクセス》である（Preiser，CD 番号：89583，Ⓟ2003）。

51 拙稿「総力戦下のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」，501頁。

52 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 23. 4. 1944, S. 5.

53 この音源は，Meloclassic から2013年に CD 化されている（CD 番号：MC-2010）。

54 拙稿「1942/43年のシーズンにおけるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のラジオ放送番組」（『桜文論叢』第95巻，2017年），22頁。

55 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 30. 4. 1944, S. 5.

56 https://www.wienerphilharmoniker.at/de/konzerte/rundfunk-konzert/7270/（アクセス日：2022年 9 月23日）

57 この音源は1989年に CD 化されている（Preiser，CD 番号：93053）。録音データは，DRA の資料による（DRA. K000589919）。

58 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 18. 4. 1943, S. 5; Reichsrundfunk, Jahrgang 1943/44, Heft 1 (4. April 1943), S. 14.

59 Böhme und Adler, a. a. O., S. 52.

60 Ebd., S. 48.

61 録音データに関する問題をややこしくしているのは，ソ連軍に接収されたテープがベルリンに返還された際に制作された録音リストのデータ区分方法である。録音日とダビング日が分けて記載されているのだが，この表記の仕方がわかりにくいのだ。具体的に述べると，同書の凡例では区分「62」で記載される日付はダビング日，区分「63」で記載される日付は録音日である（ebd., S. XXIII）。先のブルックナーとブラームスについても，「録音日」「ダビング日」といった言語上の表記ではなく，この区分の数字に続けて日付が記されている。このような表記の仕方は，同書の凡例をきちんと把握していなくては，誤解を生む元となる。この 2 つの音源は，1998年に Tahra レーベルから発売された。CD 化に際しては，このリストも参照されたと考えられ，ブルックナーは1944年 9 月 8 日，ブラームスはこの翌日の演奏とされた（Tahra, CD 番号：TAH 320/322）。問題を大きくしたのは，CD 化に際して，収録場所がバーデン・バーデンとクレジットされたことである。参照されたと思われる資料には収録場所の記載はない。それゆえ，状況証拠から，この日付に見合った公演地が割り出されたのだろう。実際，ベルリン・フィルは同年 7 月31日から 9 月15日までバーデン・バーデンに疎開中で，時折，当地で公演を行っていた（同行していた指揮者は，ローベルト・ヘーガーとルドルフ・クラッセルト）。この収録情報に関する問題は DRA においても認識されており，2017年に論者が同館より提供されたデータベースの登録情報によると，ブルックナーの収録日とされる 9 月 8 日は誤り，ブラームスの収録日は不詳とされていた。

62 https://www.abruckner.com/articles/articlesenglish/berkyjohnpinpointi/（アクセス日：2022年 9 月25日）　このサイトは，ブルックナーの録音データを網羅的に収集

しているところである。このデータベースを見ると，件の録音においてはDRAで採用されたとする3月10日のみが提示されているが，これは同曲が演奏されたコンサートの開催日でもある。先のサイトのリサーチに関する記載においては，本稿で紹介した2日の可能性が示唆されている。論者の知る限り，ナチス・ドイツ時代に，コンサート当日に無観客の放送用録音が行われた事例は存在しないため，本稿においてはこの2日間を録音データとして示した。

63 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 21. 5. 1944, S. 4f.; Reichsrundfunk, Jahrgang 1944/45, Heft 3/4 (Mai 1944), S. 36.

64 リストの《ピアノ協奏曲第1番》の録音データは，DRA提供の資料に基づく（DRA. K000497643）。

65 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 28/29. 5. 1944, S. 5.

66 Neues Wiener Tagblatt, 7. 6. 1942, S. 5. この記事によると，放送されたのはシューベルトの《交響曲ニ長調》である。新聞の情報ではオーケストラ名が表示されていないため，演奏の候補となるのは1942年3月のウィーン・フィル100周年記念公演における《交響曲第3番》が可能性として挙がってくる。今回の場合，この可能性は低く，「ハ長調」（つまり《交響曲第8番「ザ・グレート」》）の誤りと思われる。件の番組は，18時10分から19時30分までで，フルトヴェングラーによる交響曲の演奏の後，プフィッツナーの《弦楽四重奏曲第3番》の演奏が予告されている。これに要する演奏時間は25分程度である。残り55分で放送時間をうまく埋められるシューベルトの作品となると，《交響曲第3番》（演奏時間約25分）ではなく，《交響曲第8番「ザ・グレート」》（演奏時間約50分）のほうが妥当だからである。また，この翌週（6月14日）には，「ベルリン芸術週間」の録音と明記されたフルトヴェングラーとベルリン・フィルによるシューマンの《マンフレッド》序曲と《ピアノ協奏曲》の放送が予告されている。Salzburger Volksblatt, 13. 6. 1942, S. 4.　この2曲の演奏が行われた公演の後半の曲目がシューベルトの《ザ・グレート》であるため，当該のコンサートを2回に放送したと考えるのが妥当だろう。

67 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 13. 12. 1942, S. 6.

68 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 4. 6. 1944, S. 5.

69 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 11. 6. 1944, S. 5. モーツァルトの《交響曲ト短調》で想定できるのは第25番と第40番の2曲だが，現存するヘーガー指揮による録音は第40番のほうである。Deutsches Rundfunkarchiv (hrsg.): Sonderhinweisdienst. Wolfgang Amadeus Mozart 1756 – 1791 (PDF), Deutsches Runfunkarchiv 2005, S. 36. この録音は1944年3月20日と21日に行われた（DRA. K000473066）。

70 Reichsrundfunk, Jahrgang 1944/45, Heft 5/6 (Juni 1944), S. 60.

71 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 18. 6. 1944, S. 5.

72 この件については，本稿において1944年2月20日に「不滅の音楽」第1回で放送されたベートーヴェンの《交響曲第5番》を述べた際に言及した。本稿の注19も参照。

73 録音データと出演者は，2009年にCD化されたこの音源の解説書による（Profil, CD

番号：PH07060）。

74 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 22. 10. 1944, S. 4.

75 Reichsrundfunk, Jahrgang 1944/45, Heft 7/8（Juli 1944）, S. 85.

76 BA. R 55/556. Fritzsche-Sitzung am 28. 6. 44 im Haus des Rundfunks.

77 Joseph Goebbels: Die Tagebücher von Joseph Goebbels. Hrsg. von Elke Fröhlich, München u.a.（K. G. Saur）1993-2008, Teil II, Bd. 13, S. 52f.

78 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 2. 7. 1944, S. 5.

79 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 16. 7. 1944, S. 5.

80 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 23. 7. 1944, S. 5.

81 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 9. 7. 1944, S. 5.

82 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 30. 7. 1944, S. 5.

83 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 23. 7. 1944, S. 5.

84 この音源は1994年にCD化された（Koch Schwann，CD番号：3-1509-2）。

85 ベートーヴェンの《ピアノ・ソナタ第8番「悲愴」》の収録に関する情報は，DRAより提供されたデータに基づく（DRA. K000395243）。

86 この音源は1998年にCD化された（Tahra，CD番号：TAH 320/22）。

87 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 25/26. 12. 1943, S. 5. この時に放送された曲は，ほかにヴェーバーの《オイリュアンテ》序曲である。ブラームスとヴェーバーのこの序曲は，1943年12月17日，クナッパーツブッシュとベルリン・フィルによるベルリンにおけるコンサートで演奏されている。この公演の前後に無観客の放送用録音が行われた可能性もあるように思われる。

88 収録日に関する問題と現存する音源情報は，拙稿「総力戦下のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」の495-496頁を参照。

89 この音源は2013年にCDで発売された（Melo Classic，CD番号：MC-4001）。

90 Michael Raucheisen. Der Mann am Klavier, Membran 223067（CD）, ©2005.

91 Goebbels, a. a. O., Teil II, Bd. 11, S. 291.

92 Ebd., Teil II, Bd. 11, S. 360f.

93 Ebd., Teil II, Bd. 12, S. 295f.

94 Ebd., Teil II, Bd. 12, S. 120.

95 Ebd., Teil II, Bd. 11, S. 564.

96 Ebd., Teil II, Bd. 11, S. 423.

97 Ebd., Teil II, Bd. 11, S. 514.

98 Ebd., Teil II, Bd. 13, S. 81.

99 Ebd., Teil II, Bd. 12, S. 47.

100 Ebd., Teil II, Bd. 11，S. 462.

101 Ebd., Teil II, Bd.11, S. 473.

102 Ebd., Teil II, Bd.12, S. 253.

103 Ebd., Teil II, Bd.13, S. 189.

104 BA. R 55/556. Protokoll der Programmsitzung mit Herrn Dr. Scharping am Mittwoch, den 12. Juli 1944, 15.30 Uhr.

105 Ebd.

106 本稿でもこれから先に見ていくように，ゲッベルスに番組案について文書が提出されたことを示す資料は残されているが，提出された文書そのもの，ゲッベルスのコメントが記入された文書は現存しないと思われる。

107 8月の「不滅の音楽」の放送は，『帝国放送』の予告通りに行われた。Reichsrundfunk, Jahrgang 1944/45, Heft 9/10（August 1944）, S. 103.

108 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 6. 8. 1944, S. 5.

109 詳細は拙稿「バイロイト音楽祭とナチス・ドイツ興亡――ラジオ放送をめぐる実証的検証」（『オペラ／音楽劇研究の現在――創造と伝播のダイナミズム』，水声社，2021年）の205-206頁を参照。

110 出演者情報は，2004年に刊行された同音源の CD 解説書による（Music and Arts Programs of America，CD 番号：CD-1153）。

111 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 13. 8. 1944, S. 4f. この時に放送された《ハフナー》の音源はレコード化されたと思われる。例えば，Club Mondial Du Disque から発売された LP レコード（レコード番号：CMD 305，発売年不明）は，この指揮者とオーケストラによるものである。

112 John Hunt: Philharmonisches Orchester Berlin. The Historic Years 1913-1954, London（Travis & Emery Music Bookshop）2018, S. 224. モーツァルトの《クラリネット協奏曲》については，Hunt のように，イタリアにおいて LP レコードで発売された音源を1943年に収録された放送用音源とみなす向きがある（論者は，Hunt が挙げている Longanesi レーベルの LP レコード（GCL 48）ではなく，1981年に Melodram からレコード番号 MEL 216（2）で刊行されたものを参照した）。論者が参照した LP レコードのジャケットの表記によると，クラリネットはアルフレート・ビルクナー（Bürkner ではなく Birkner とされている），オーケストラはベルリン放送交響楽団，指揮者はハンス・クナッパーツブッシュ，録音は1952年である。同レコードにおいては，収録されている他の作品の出演者がベルリン・フィルとの演奏であるにもかかわらず，すべてベルリン放送交響楽団と記されている。こうした不手際の多さから，この音源の信頼性は低いと思われる。

113 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 24. 10. 1943, S. 5; Reichsrundfunk, Jahrgang 1943/44, Heft 7（Oktober 1943）, S. 143.

114 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 20. 8. 1944, S. 4f.

115 Neues Wiener Tagblatt, 1. 11. S. 5.

116 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 27. 8. 1944, S. 5. この放送で使用された音源は1998年に CD 化された（Tahra，CD 番号：TAH 320/22）

117 Historisches Archiv der Wiener Philharmoniker. Depot Staatsoper. Mappe Rundfunk. Hans Sachs（Reichssender Wien）an die Wiener Philharmoniker, 20. 6.

1944.

118 Goebbels, a. a. O., Teil II, Bd. 13, S. 347.

119 BA. R 55/556. Protokoll der Programmsitzung mit Herrn Ministerialdirektor Fritzsche am Mittwoch, den 26. Juli 1944, 15.30 Uhr.

120 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 3. 9. 1944, S. 5.

121 出演者と録音データは1991年に CD 化されたこの音源の解説書による（Deutsche Grammophon，CD 番号：435 329-2）。

122 Goebbels, a. a. O., Teil II, Bd. 13，S. 411.

123 Rundfunkwoche Wien. 3. Jahr (1940), Folge 48, S. 8.

124 Kleine Wiener Kriegszeitung, 10. 9. 1944, S. 7.

125 DRA より提供された資料による（DRA. K000622534; K000419846; K000622533; K000419847; K000617620; K000419848）。

126 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 24. 9. 1944, S. 4. 当日の新聞欄の情報では，協奏曲でベルリン・フィルが出演していたことの記載はない。現存するテープの情報や，以下の資料により，協奏曲はベルリン・フィルと確認できる。Reichsrundfunk, Jahrgang 1944/45, Heft 11/12, (September 1944), S. 124.

127 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 25. 7. 1943, S. 5; Reichsrundfunk, Jahrgang 1943/44, Heft 4 (Juli 1943), S. 79.

128 この音源は1998年に CD 化された（Tahra，CD 番号：TAH 195）。

129 BA. R 55/556. Protokoll der Programm-Sitzung am Mittwoch, den 6. September 1944, 15.30 Uhr, mit Herrn Ministerialdirektor Fritzsche.

130 Reichsrundfunk, Jahrgang 1944/45, Heft 13/14 (Oktober 1944), S. 146.

131 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 1. 10. 1944, S. 4.

132 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 8. 10. 1944, S. 4 und 6.

133 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 15. 10. 1944, S. 4; Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 14. 10. 1944, S. 4.

134 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 22. 10. 1944, S. 4.

135《ブルレスケ》の録音については，拙稿「ナチス・ドイツにおける劇場閉鎖とウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」（『桜文論叢』第106巻，2022年）の44頁ならびに60頁注87を参照。

136 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 29. 10. 1944, S. 4.

137 この録音日は，1998年に発売された同音源の CD の解説書による（Tahra，CD 番号：TAH 201/2）。

138 DRA より提供された同音源の資料に基づく（DRA. K000625087）。この資料によると，収録場所はバーデン・バーデンである。DRA に保存されている音源はオリジナルからのコピーだが，音源の保存状態が悪く，随所にドロップアウト等が認められる。

139 Ebd., S. 35. この音源は1986年に LP レコードで発売された（Melodiya，レコード番

号：M10 47443 008）。

140 ブラームスの《二重協奏曲》の収録データは，拙稿「総力戦下のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」の503-504頁を参照。この音源の所在地はこれまでの調査では確認できなかった。

141 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 26. 9. 1943, S. 5.

142 本稿の注26を参照。

143 Goebbels, a. a. O., Teil II, Bd. 14, S. 36.

144 Ebd., Teil II, Bd. 14, S. 64.

145 BA. R 55/556. Protokoll der Programm-Sitzung am Mittwoch, den 6. September 1944, 15.30 Uhr, mit Herrn Ministerialdirektor Fritzsche.

146 BA. R 55/559. Leiter Rundfunk an Herrn Reichsminister, 28. 9. 1944.

147 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 5. 11. 1944, S. 4.

148《アウリスのイフィゲニア》序曲は，同音源の CD による（Tahra，CD 番号：TAH 139/40，1995年発売）。

149 続く 5 曲は，同音源の CD による（Tahra，CD 番号：TAH 192/3，1997年発売）。

150 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 12. 11. 1944, S. 4. この新聞の情報によると，この番組の放送時間は19時10分までだった。

151 録音データはこの音源の CD の解説書による（Profil，CD 番号：PH07048，2009年発売）。

152 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 19. 11. 1944, S. 4.「不滅の音楽」においてフルトヴェングラーとウィーン・フィルの録音が使用されたのは，このブルックナーのほか，1945年 1 月放送のベートーヴェンがある。これらの録音は，フルトヴェングラーとウィーン・フィルの放送用録音をまとめた CD ボックスとして，2012年に発売された（Orfeo，CD 番号：C 834 118 Y）。

153 録音の成立と収録日については，拙稿「ナチス・ドイツにおける劇場閉鎖とウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」の41-43頁を参照。

154 BA. R 55/558.Westerman an Herrn Ministerialdirektor Fritzsche, 16. 10. 1944.

155 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 26. 11. 1944, S. 4.

156 この音源は1996年に CD 化されている（Arbiter，CD 番号：103）。収録日はこの CD の解説書による。収録場所は，DRA に残されている同曲の音源データによる（DRA. K000497959）。

157 Goebbels, a. a. O., Teil II, Bd. 14, S. 209.

158 Ebd., Teil II, Bd. 14, S. 244.

159 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 21. 11. 1944, S. 2.　この批評については，拙稿「ナチス・ドイツにおける劇場閉鎖とウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」の43頁において詳しく扱った。

160 BA. R 55/559. Leiter Rundfunk an Herrn Reichsminister, 17. 10. 1944.

161 BA. R 55/556. Fritzsche-Sitzung am 29. 11. 1944 im Haus des Rundfunks. この日の

会議を記録した議事録は，別の筆者によるものも残されている。これによると，リストが元旦の番組として妥当ではない理由として，録音の手配が間に合わないことが述べられている。BA. R 55/556. Protokoll zur Programmsitzung am Mittwoch, 29. November 1944, 15.30 Uhr unter Leitung des Herrn Ministerialdirektor Fritzsche. なお，クリスマスに予定されていたベートーヴェンの2曲は，1944年11月にクレメンス・クラウス指揮，ベルリン・フィルにより，放送用に録音されたものであったと思われる。拙稿「ナチス・ドイツ時代のクレメンス・クラウスとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団」（『桜文論叢』，第91巻，2016年）の424-425頁を参照。

162 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 3. 12. 1944, S. 4.

163 出演歌手の情報は，CD の解説書による（Preiser，CD 番号：90195，1994発売）。

164 拙稿「総力戦下のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」，500-501頁を参照。

165 Neues Wiener Tagblatt, 10. 12. 1944, S. 3.

166 クラウスとベルリン・フィルによるハイドンの放送用録音については，拙稿「ナチス・ドイツ時代のクレメンス・クラウスとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団」，425-426頁を参照。

167 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 17. 12. 1944, S. 4.　ピアノ協奏曲の録音は現存し，これによると，この録音の収録日は1944年10月13日である。

168 このデータは，1997年に発売された CD の解説書による（Tahra，CD 番号：TAH 192/3）。

169 Goebbels, a. a. O., Teil II, Bd. 14, S. 438.

170 Neues Wiener Tagblatt, 24. 12. 1944, S. 5.

171 Neues Wiener Tagblatt, 28. 12. 1944, S. 3; Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 31. 12. 1944, S. 6.

172 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 7. 1. 1944, S. 4.

173 Neues Wiener Tagblatt, 13. 1. 1945, S. 3.

174 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 20. 1. 1945, S. 2.

175 https://www.wienerphilharmoniker.at/de/konzerte/rundfunk-konzert/6114/（アクセス日：2022年 9 月23日）

176 Goebbels, a. a. O., Teil II, Bd. 15, S. 180.

177 Völkischer Beobachter. Süddeutsche und Münchener Ausgabe, 27. 1. 1945, S. 6; Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 6. 2. 1945, S. 4.

178 CD 化された音源のデータに基づく（Preiser，CD 番号：90216，1994年発売）。これは，ウィーン・フィルのホームページにおいて公開されている記録とも一致している。https://www.wienerphilharmoniker.at/de/konzerte/rundfunk-konzert/945/（アクセス日：2022年 9 月23日）

179 拙稿「ナチス・ドイツにおける劇場閉鎖とウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」の44および48頁を参照。

180 Innsbrucker Nachrichten 3. 2. 1945, S. 4.

181 この放送で使用された《フーガの技法》の録音は，2016年に CD 化された（Meloclassic，CD 番号：MC-5005）。録音データはこの解説書による。

182 Goebbels, a. a. O., Teil II, Bd. 15, S. 311.

183 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 11. 2. 1945, S. 4.

184 出演者情報は刊行された CD による（Preiser，CD 番号：90250，1995年発売）。

185 このデータは，クレメンス・クラウスの手記による。Österreichische Nationalbibliothek. Musiksammlung. F59 Clemens Krauss Archiv 158/1-3. Clemens Krauss: Dirigir-Daten, III. Band（Manuskript）. 前出の CD のデータでは，1944年 3 月13日から16日とされている。

186 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 4. 5. 1944, S. 5.

187 Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 7. 5. 1944, S. 5.

188 放送当日の新聞から情報は得られなかったため，この 5 日後の番組批評記事から曲目を特定した。Völkischer Beobachter. Berliner Ausgabe, 23. 2. 1945, S. 2.

189 CD 全集「フルトヴェングラー 帝国放送局（RRG）アーカイヴ 1939-45」の解説書（41頁）に掲載されている，ベルリン・フィルのアーカイブ所蔵の同録音に関する文書の写真による。

190 Theodor Kellenter: Die Gottbegnadeten. Hitlers Liste unersetzbarer Künstler, Kiel（Arndt）2020.

191 BA. R 55/559. Leiter Rundfunk an Herrn Reichsminister, 14. 11. 1944. 補足は，現存する録音資料により行った。

192 この音源は CD 化されている（Tahra, CD 番号：TAH192/193, 1997年発売）。

193 このシューマンの《チェロ協奏曲》の録音は現存している（DRA. K000498102）.

194 Völkischer Beobachter. Süddeutsche und Münchener Ausgabe, 12. 3. 1945, S. 4.

195 BA. R 55/559. Anruf Dr. Schönicke. Betr.: Hamburgisches Philharmonisches Orchester. [19. 12 1944].

196 BA. R 55/559. Der Reichsminister an den Reichsstatthalter in Hamburg Gauleiter Kaufmann. [19.] 12. 1944. 残されている文書は回答の草案だが，草案とともに保存されている文書において，同年12月19日18時までに，ゲッベルスがこれを送付する指示を出していることが確認できる。BA. R 55/559. Ministeramt RR Dr. Heinrichsdorff/Ell an Herrn Leiter Rundfunk. Betr.: Schreiben von Gauleiter Kaufmann, 19. 12. 1944.

197 Hanns Kreczi: Das Bruckner-Stift St. Florian und das Linzer Reichs-Bruckner-Orchester（1942-1945）, Akademische Druck- u. Verlagsanstalt（Graz）1986, S. 250-259.

198 BA. R 55/556. Protokoll zur Programmsitzung am Mittwoch, 13. Dezember 1944, 15.30 Uhr unter Leitung von Herrn Ministerialdirektor Fritzsche.

199 1944年 4 月 7 日の聖金曜日に放送されたバッハの《マタイ受難曲》は，クレメン

ス・クラウス指揮，ウィーン・フィルによる演奏だった。詳細は拙稿「総力戦下のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」の490-495頁を参照。

200 BA. R 55/559. Protokoll der Programmsitzung am Mittwoch, 21. Februar 1945, 15.30 Uhr unter Leitung von Herrn Ministerialdirektor Fritzsche.